III章

街を考える

街の変遷

めまぐるしく移りゆく都市――。
その歴史をふり返ってみると、街の顔がよく見えてくるものです。
しばし歩みをとめて、中区の街がどのようにして起こったか、またどのようにして市街化が
周辺に広がっていったのか、その軌跡を追ってみましょう。
中区の歴史は、開港以来、ほんの一三〇年間の出来事です。おじいさんやおばあさんのなかには、
実際に体験していることも少なくないはずです。
こんな身近な歴史ですから、本に書いてあるような歴史とは違って、
子供のころの遊びなど身近なものから思い返すようにして、
街の変遷を実感としてとらえていくことにします。
こうして中区の歴史をふり返ると、いつもなら何気なく通り過ぎてしまった街角が、
実に多くのドラマをもって語りかけてくるような気がしてきます。
砂のようにつかみどころのなかった巨大都市にも、どこか親しみをおぼえるものが出てきます。
私たちの街づくりは、こうしてさらに歩み始めます。

明治初期、山手の丘より居留地をのぞむ。

大正初期、山下町の一画

中区の街づくりの二つの顔

●激動の歴史

中区の歩みは、同時に横浜の歩みでもあり、まさに激動の歴史のくり返しでした。

東海道筋から離れた一寒村だった横浜は、開港によって外国からも国内各地からも、商人が洪水のように集まり、あっという間に国際貿易都市となりました。街は人であふれ、海岸や沼地が次々に埋立てられ、横浜はどんどんふくれあがりました。しかし、その後の数回の大火災により、街は灰と化してはまた復活するという歴史をくり返すことになるのです。この不屈のエネルギーに満ちた歴史が、この街の第一の顔といえましょう。

●村から街へ

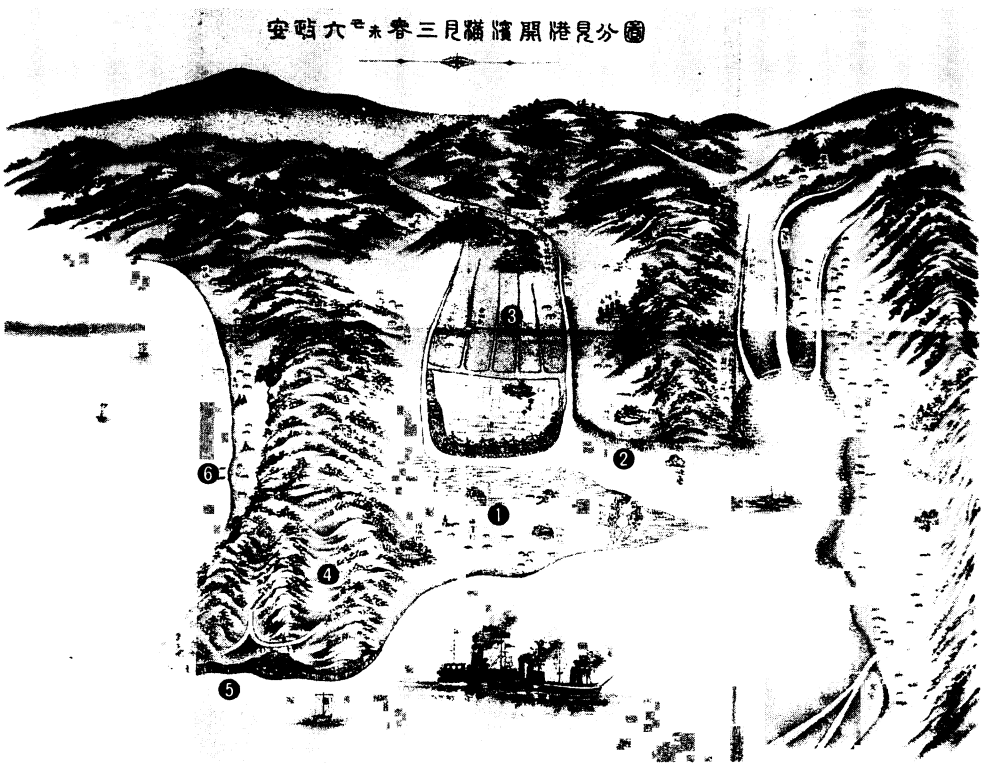
もう一つの顔は、美しい自然に囲まれた静かな村が、都市化されていく歴史です。北方村、本牧本郷村、根岸村などの郊外は、半農半漁の村でしたが、都心部の影響を受け、市街化していきました。これらの地域は、たび重なる災害にともなう都心からの避難者の受け入れ先となり、また食糧の補給基地となって、常に都心をバックアップしながら市街化の途を歩んできました。

ところが、戦災では都心と同じような被害を受けながら、不幸なことに、進駐軍による接収の傷がかなり深く、復興は都心よりずっと遅れてしまいました。

また、埋立てによって海辺を失い、開発によって緑が減り、こうした開発本位の街づくりが、今では戦争の傷跡以上に、街からうるおいを奪う皮肉な結果となっています。

●開港以前の中区にあたる村々

横浜開港見分図（安政6年）　横浜市立図書館蔵



「新編武蔵風土記稿」（文政10年、1827年）によると、開港以前の中区の地域には❶横浜村（87戸）、❷野毛浦、❸吉田新田（天保11年、1840年で88戸）、❹北方村（70戸）、❺本牧本郷村（430戸）、❻根岸村（180戸）がありました。

中区の街づくりの歩み——開港から現在まで

開港・文明開化期［安政六年～明治末ごろ］

開港以前、中区にあたる地域には六四ページの絵図のとおり、横浜村をはじめいくつかの村がありました。これらの村は、東海道から離れ、商品生産の少ない貧しい半農半漁の村でした。このなかの一寒村が国際貿易都市として飛躍的に発展し、押し寄せる人の波で、急速に膨脹していきました。

●居留地を隔離した区画整理

都市形成の第一歩は、街を区画することでした。幕府は横浜村の住人を強制的に本村（現在の元町）へ立ち退かせ、ここを居留地として、移住してきた外国人と日本人商人を住まわせました。中央にあたる現在の県庁の位置に、神奈川運上所を設け、その東側を外国人居留地に、西側を日本人の街にはっきりと分けて、内外通商を監視しやすいようにし、同時に尊皇攘夷派の日本人が外国人居留地に侵入して危害を及ぼすことを防ぎました。

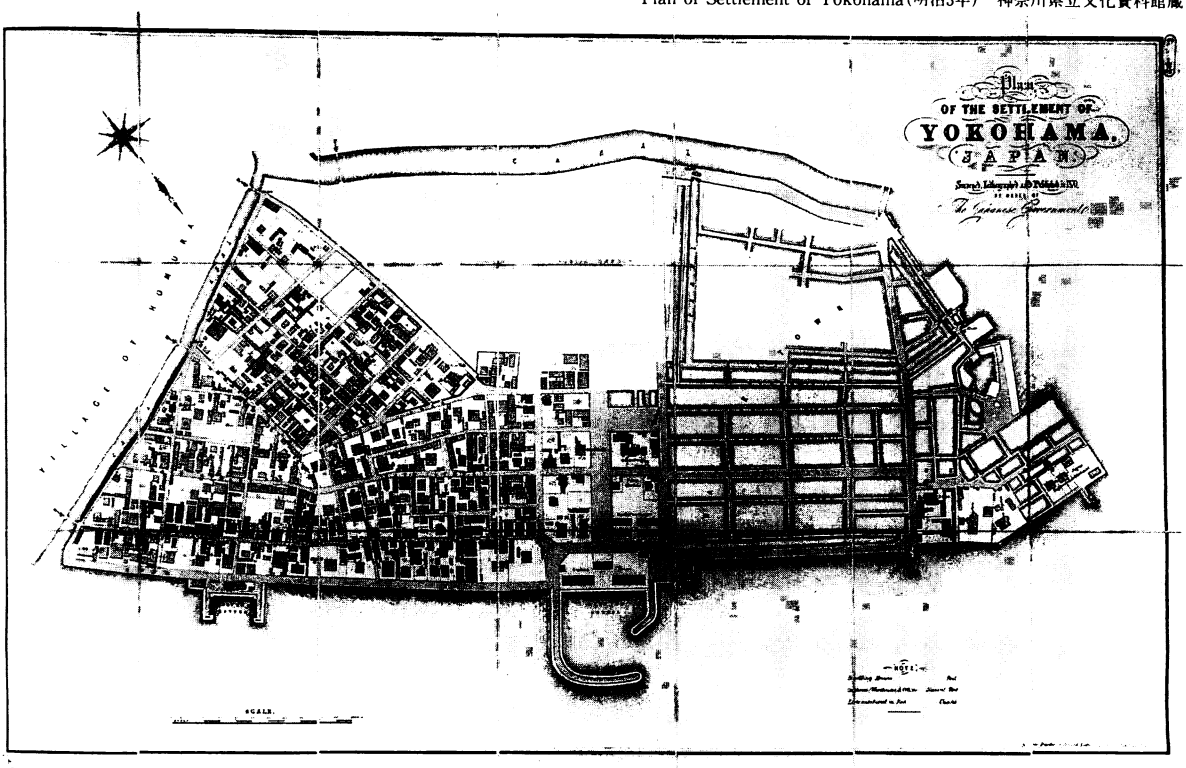
●近代都市計画の先駆

開港によって形成された街は、わずか七年後の慶応二年（一八六六年）、豚屋火事によって関内の三分の二が焼き払われてしまいました。以後、外国人街への延焼を防ぐため、防火帯として幅三六メートルの日本大通りがつくられました。

街に生じたいろいろな問題に対処するため、意図的、計画的に整備を行うことを都市計画といいますが、この「第三回地所規則」と名づけられた計画は、街の防火を目的とした道路の計画的整備や、

●明治初期の都心部

Plan of Settlement of Yokohama（明治3年）　神奈川県立文化資料館蔵



中央にある太い道路が、防火帯としてつくられた日本大通りで、これをはさんで右側が日本人居住地、左側が外国人居留地です。現在の都心部の街並がこの時点でほぼでき上がっています。

公園・下水道の整備などが盛り込まれていたので、これがわが国初の都市計画となりました。

同時に行われた横浜公園、山手公園、街路樹、下水道の整備も、近代都市計画の先駆として注目されました。

●急激な人口集中に追いつかない上下水道

明治にはいると、ガス灯、鉄道、上下水道など、都市基盤の整備が次々に行われました。しかし、明治一五年に七六、〇〇〇人だった横浜区の人口が、明治三〇年には一八七、〇〇〇人になるという急激な人口増加には、とても追いつかない状況でした。

ついに明治一〇年、不良な飲料水が原因でコレラが流行し、死者六三五人を出すという大惨事を起こしてしまいました。一〇年後の明治二〇年、相模川から野毛貯水池までの一二〇キロを鉄管で結び、やっと日本初の近代水道が完成しました。

また、明治二〇年には、居留地内に我が国初の陶管下水道が完成しました。

●郊外へも市街化の波が

郊外の閑静な農村、漁村だった北方村、本牧本郷村、根岸村にも、市街化の芽が出始めました。

関内の居留地が山手へ拡大してきたことから、近代化の影響を受ける機会が多くなったのです。外人遊歩道、根岸競馬場、本牧十二天付近の海水浴場、天沼のビール工場などができて、その後の開発につながっていきました。

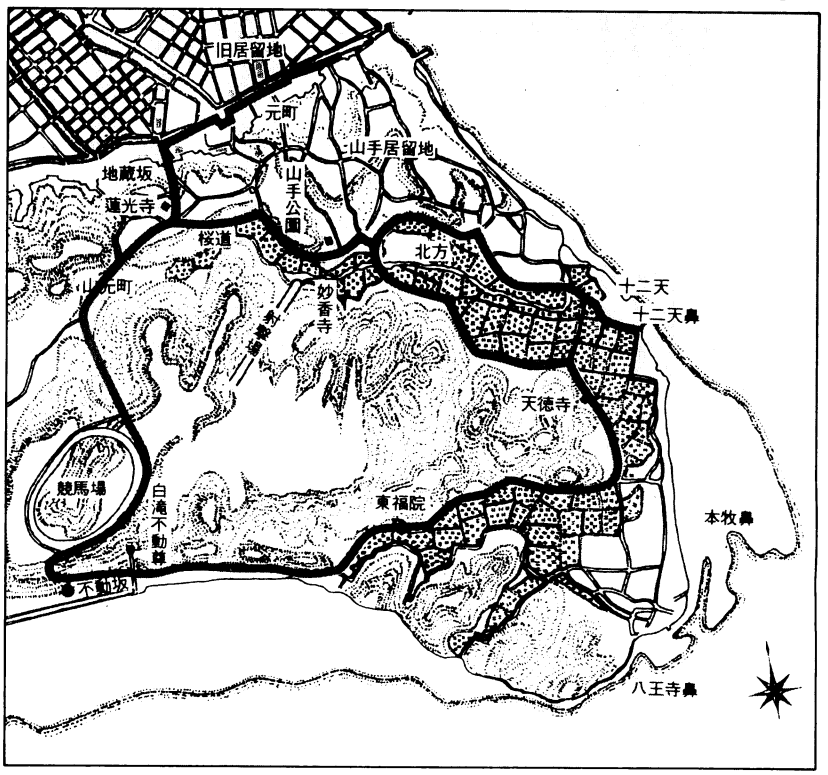
●日本人と外国人が共に暮らす街

明治三二年、居留地制度は廃止されました。

外国人の中には、居留地を出て郊外に住む人も現れ、明治四二年には、根岸、鷺山、北方に約一〇〇人ほどの外国人が住んでいたと記録されています。こうして、横浜は次第に日本人と外国人が共に暮らす街となりました。

●明治時代の郊外部

山手根岸外人遊歩道略図
「港町　横浜の都市形成史」より



外人遊歩道は散歩を好む外国人の要求によってつくられたもので、特に現在の根岸旭台の不動坂は、美しい海岸線が望める場所として好まれました。本牧十二天などは外国人の海水浴場になりました。

繁栄期［明治末期〜大正一二年］

中区は、大正時代にはいって繁栄期を迎えます。都心部はすでに都市としての成熟期にはいり、郊外も路面電車の開通により、ようやく本格的に市街化が進められました。

●貿易港として前進する横浜港

開港以来、いっ気に発展を遂げた横浜は、この時期にこれまでの不備な点を解決するいろいろな整備事業が行われました。

飛躍的に増大する貿易貨物に対応するため、現在の新山下にあたる山下海岸の埋立てなど、港湾機能を充実させました。また、当時東洋一の規模を誇る新港ふ頭と大桟橋が建設され、横浜港を貿易港として大きく前進させました。

●路面電車の開通にともなって、開発される郊外

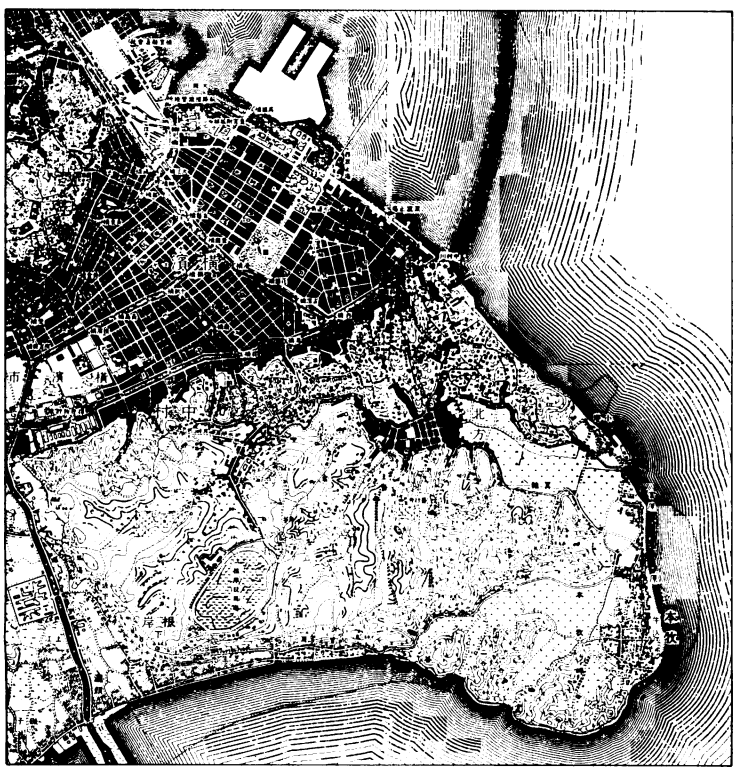
明治四四年、横浜電気鉄道（のちの市電）は、本牧宮原まで開通し、さらに大正一三年には三之谷まで延長され、これにともなって郊外が急速に市街化されました。

本牧での宅地開発は、明治三五年ごろからかなり盛んで、原三溪による本牧三之谷の宅地造成が行われていました。根岸では、競馬場の影響で早くから開けていた山元町や、メリヤス工場のできていた大和町は、それなりの発展はしていましたが、最大のネックは都心との間に山手の丘があることで、地蔵坂など交通の便の悪さが発展に歯どめをかけていました。それも麦田のトンネルができ、電車が開通したことで解決し、三溪園や本牧の海水浴場などは、観光地としてのにぎわいも出てきました。

それまで牛乳やアスパラガス、トマトなどの西洋野菜の生産が盛んだった根岸の丘陵部では、大正八年、埋地に大火が発生したとき、その被災者の住宅やアパートが柏葉に建てられると、次第に住宅地として移り変わっていきました。

●繁栄期の中区

明治39年地形図　国土地理院



黒い部分が住宅などの建っている地域で、都心部と元町・石川町地区はすでにびっしりと立て込んでいます。郊外部では谷戸部から宅地化が始まり、この後、市電の開通によって急速に開けていきました。

関東大震災・復興期［大正一二年～昭和一九年］

関東大震災によって、横浜は壊滅的な被害を受けました。被害家屋は九五パーセントにのぼり、二万人あまりの死者を出しました。その復興途上の昭和二年、中区は誕生しました。

●県年間予算の一〇倍の費用を投じた復興事業

復興には、区画整理が最初に行われました。個々の土地の一割を無償提供させるという、かなりの強行策でしたが、都市の災害を最小限に押えるための都市計画の考え方にもとづくものでした。

現在の本牧通りも、このとき交通の便と防火帯の役目を考えて、幅二二～二五メートルに拡幅されました。市では、関内から横浜駅にかけての地域を市の中枢地として大々的に整備しようと計画しましたが、国からの補助金が不足して計画を縮小せざるを得なくなりました。結局、横浜経済の生命である港湾施設など都心機能を重点的に修復するのにとどめ、肝心の住宅整備は後まわしとなりました。

しかし、住居を失った市民には、埋立てが完了したばかりの新山下に二八〇戸のアパートが建ち、また豆口や柏葉にも現在の団地の先がけとなった市営住宅が建てられ、それぞれ街の発展や宅地化のきっかけをつくりました。

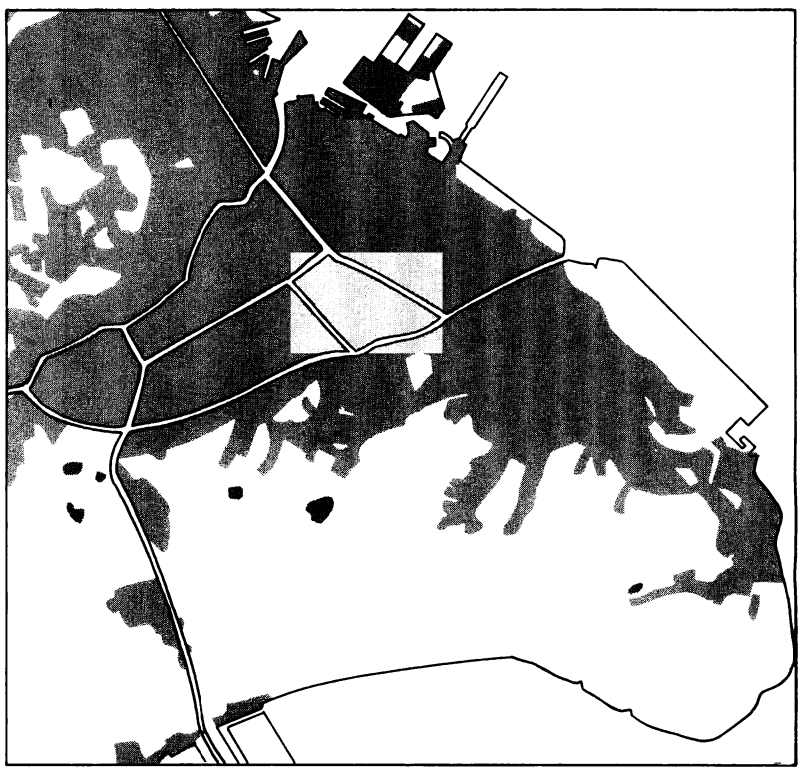
復興は、昭和四年ごろまでにほぼ完了し、その費用は二～三億円で、当時の神奈川県の年間予算二、三〇〇万円の約一〇倍でした。

●市民の生命を救った公園

震災では、掃部山公園、横浜公園が多くの市民の避難所となり、たくさんの人命を守りました。この公園の機能が注目されて、復興には、公園の増設に大きな力が注がれました。倒れた建物のガレキの処分をかねて、山下町の海岸を埋めてつくったのが、現在の山下公園です。臨海公園としては全国初のものです。このほかに、野毛山、元町の公園がこのときにつくられました。

●関東大震災の壊滅的な被害

「横濱復興誌」震災被害図より作成



黒い部分が消失、全壊した地域です。中区の都心部は、ほぼ全滅ともいえる被害を受け、埋立てられたばかりの新山下や、あまり被害を受けなかった郊外部に、被災者を受け入れる住宅が建てられました。

戦災・接収、そして復興

［昭和二〇年～三四年］

関東大震災からようやく復興を遂げた横浜は、昭和二〇年の第二次世界大戦・横浜大空襲で、再び焼け野原と化しました。さらにこの復興には、進駐軍による接収が大きな障害となりました。

●戦災・接収

戦争で横浜は、市街地の四二パーセントが焼失、約四〇万人が被災しました。中区は区内面積の七四パーセントが接収されるというありさまでした。わずかに焼け残ったビルは進駐軍に接収され、外国人相手の土産物屋や病院などとなり、また、焼け跡にもカマボコ兵舎や小型飛行場などがつくられました。

昭和二七年、都心部の接収は解除されましたが、その代替地として、新山下三丁目に米軍のベイサイドコートが建てられました。

●防火を重視した復興事業と戦後の発展

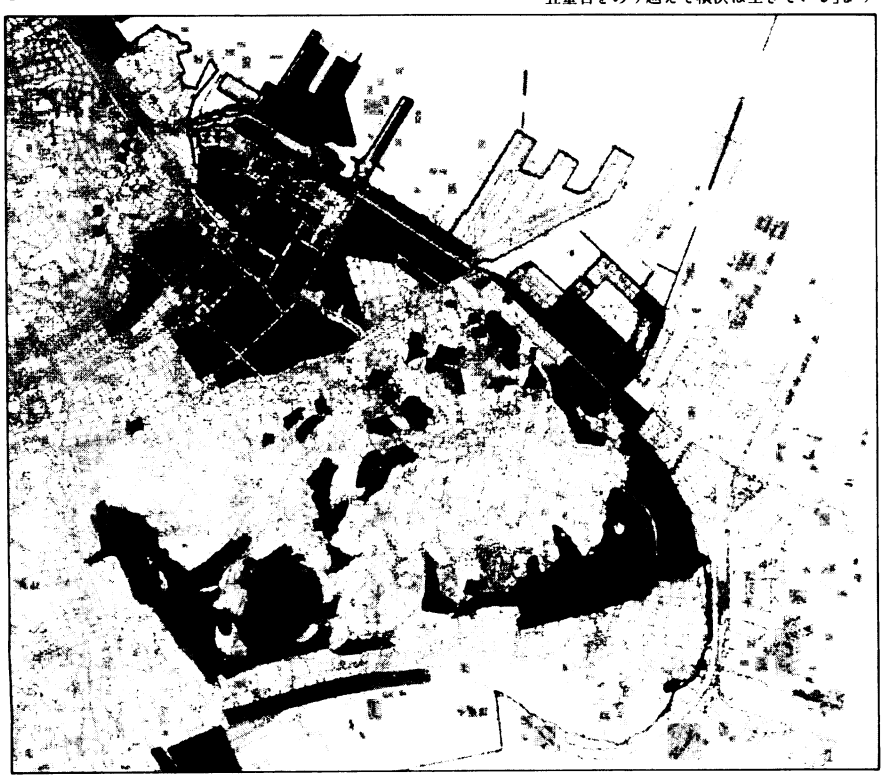
復興事業は、二度と再び都市全体が崩壊するのを防ぐため、都心では幹線道路沿いに耐火建築物を約一〇キロも連ね、火災の延焼をくいとめられるようにしました。

戦前、別荘やお屋敷町として落着いた雰囲気のあった野毛は、ヤミ市が立ち、雑踏の町に一変し、接収された山手周辺の丘陵地は、洋式のスマートな住宅が建てられ、次第に宅地化が進められました。しかし、関内は接収が解除されても、戦後の混乱で復興が思うように進まず、昭和三〇年代になっても雑草が茂るままで、人々から関内牧場とよばれる始末でした。

昭和三三年、小港に当時としては最先端の鉄筋四階建一六棟の団地が建ち、高層アパート時代の幕明けとなりました。また、接収された山下公園が返還され、港の見える丘公園が市民に開放され、ようやく市民生活にも落着きがみえてきました。

●昭和27年ごろの中区の接収地域

横浜市内中心部接収地域図
「五重苦をのり越えて横浜は生きている」より



関内、関外、山手、新山下、根岸、本牧の各地区にわたり区内74％にものぼる接収を受けた中区は、戦後の復興に大きな妨げを受けました。

埋立て・開発［昭和三五年以降］

高度経済成長を経て、中区の人口は、昭和三五年から五五年までの二〇年間に、夜間人口が減少に転じたのに対し、昼間人口が約三割も増えて、都心部は業務・商業地区としての成長を遂げました。

郊外では、宅地開発が進められ、根岸方面では昭和四〇年から四五年にかけて高層マンションの建設が続きました。昭和四二年、中区は人口のピークを迎えました。

●街に水と緑のうるおいを

昭和五三年、関外の吉田川を埋め、地下鉄を通し、地上部はグリーンベルトとして、一・三キロにわたって水と緑を配した大通り公園が完成しました。そこに石の広場、水の広場、緑の森をつくり、人にとって安全で快適な街づくりを実践しました。

自然をなくしたこの街には、今、都市の活力を維持しながらもうるおいのある街をつくろうと、全国に先がけて、人間性に重点をおいたアーバンデザイン行政が行われています。

●はるかな海

山下ふ頭（昭和二八～三八年）、本牧ふ頭（昭和三八～四五年）、根岸湾の埋立地などが造成され、有数の漁場であった中区の豊かな海はなくなりました。昭和一四年、戦争により幻の大会となった東京オリンピックのヨット競技会場として建設された新山下のヨットハーバーも、本牧ふ頭の埋立てにより、昭和四三年、江ノ島に移転しました。

●新しい街づくり

昭和五七年、本牧接収地やベイサイドコートなどが返還され、現在これらを活用した新しい街づくりが進められています。さらに、みなとみらい21事業、高速道路やベイブリッジの建設など、中区はこれから大きく変わろうとしています。

●現在の中区

昭和60年3月撮影

これまで見てきたような変遷を経て、きちんと区画整理された都心部と、自然発生的に宅地化されてきた住宅地側がはっきり分かれた現在の中区の街並がつくられてきたのです。

昭和三〇年代の遊び場、子供の遊び

今の小中学生のお父さんやお母さんが子供だったころのことです。覚えている人も多いかもしれませんが、現在はマンションや住宅に変わってしまったところなどは、原っぱや雑木林がたくさんありました。

中区は横浜の中心として早くから市街化が進められましたが、中区でも郊外の本牧や根岸のあたりは、昭和三〇年代中ごろまでけっこう自然が残っていたのです。

旧市電通り沿いと、そこから少しはいった谷戸部は、すでに人家が立ち並んでいましたが、周辺の丘陵、本牧満坂から本牧緑ケ丘、矢口台、豆口台を経て、仲尾台、竹の丸にいたるまでは、畑と雑木林が点在していました。

本牧十二天から間門にいたるところは自然の海辺で、本牧元町の海沿いは、遠浅の砂浜が広がる漁師町でした。八聖殿の丘から見下ろすと、漁をする小型船が間近に見え、その手前には海苔を養殖するひびが海面をおおっていました。

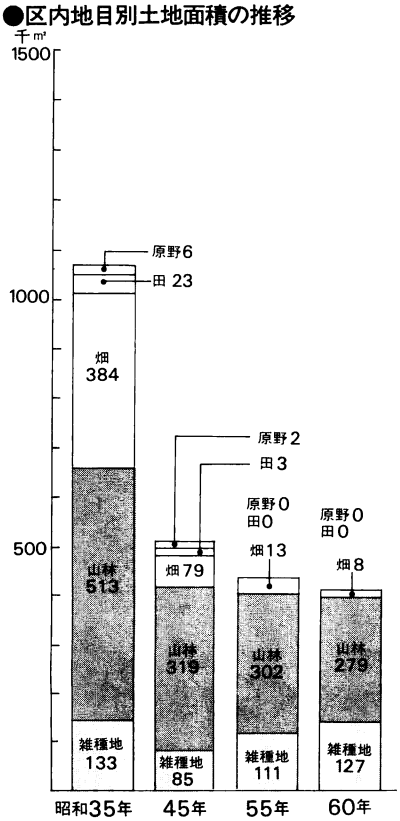
子供たちは、これらの自然をたくみに使ってさまざまな遊びを創造し、成長しました。そこの地形や環境と呼応して、子供らしい興味を生み出していったのです。

ですから、地域を考えるとき、このような子供の遊びの世界を通してのぞいてみると、また別の視野でながめた街が見えてきます。

●原っぱに集まって……

ひとつの町内のどこかしらには、原っぱという空き地があったものです。当時は、子供も多かったせいか、こういったところには、

●区内地目別土地面積の推移



※固定資産税課税対象のみで、免税点以下を含む。雑種地は、斜面緑地などです。資料：横浜市統計書

●昭和36年の本牧・根岸方面

昭和30年代には、あちこちに雑木林や畑があって、海も自然の浜辺がありました。70ページの現代の中区のようすと比べてみると、それらが住宅地や埋立て地に変わっていったことがよくわかります。

いつの間にか大勢集まってきました。そして、いつも日が暮れるまで、子供たちの声が響いていたものでした。

たとえば、今は駐車場になってしまった妙香寺台にある妙香寺の境内は、広くて男の子たちが野球やゴロベースをしていました。

女の子は、草原に咲くシロツメグサで首飾りを編んでいました。

近所の空き地や路地では、缶けり、石けり、ゴム飛び、ビー玉、メンコ……。そういうところでは、必ずミカン箱一杯にメンコを集めて、得意顔のテクニシャンがいたものです。

大鳥小学校を囲む丘や、二之谷から三之谷の丘も、木々がこんもりと茂った格好の遊び場でした。双方分かれて枝に古材を渡した砦を築き、竹でヤツデ鉄砲を作れば戦争ごっこの始まりです。

●清水の湧く、生き物の宝庫

谷戸部を囲む丘は、小規模ながら雑木林が点在しており、春から夏にかけていろいろな生き物の宝庫となり、遊びのメッカとなっていました。

今も木の多い丘の下など、清水の出るところがありますが、昭和三〇年代には、丘の下ばかりでなく畑にも清水の湧くところがありました。たとえば、今は西武団地となっている横浜緑ヶ丘高校の隣り。当時はかなり広い畑で、清水が湧いていました。また、高校の正門前の窪地も湿地で、こういったところではサワガニ、ザリガニ、オタマジャクシなどをとって遊びました。

●虫を追いかける

夏は虫とりの季節です。カブトムシやクワガタムシは、そう簡単には見つかりませんが、木々のおい茂る丘や墓地では、ときどき見られました。カブトムシのいた秘密の場所を公開すると、妙香寺、西之谷の善行寺、相沢(大平町・大芝台)の共同墓地のあたりがねらい目でした。よく、夜のうちに目指す木の幹に蜜や砂糖水をぬっておき、翌朝早くとりに行ったものでした。

●清水の湧くところで

清水が湧くところや湿地には、サワガニやザリガニ、オタマジャクシなどがたくさんいました。

●原っぱで

今は駐車場になってしまった妙香寺の境内や大鳥小学校を囲む丘、二之谷から三之谷の丘などの原っぱや雑木林では、ゴロベースや戦争ごっこに興じる子供の声が日暮れまで響いていました。

カナブンやカミキリムシは、イチジクの木によく集まって来ました。セミやトンボは、うるさいくらいどこにもいましたが、青空を悠然と飛ぶオニヤンマやギンヤンマは、なかなか見つかりませんでした。ひと夏に一匹とれば、それが自慢のタネになったくらいです。

虫とりのなかでも、懐かしいのはホンチとりです。ホンチは黒色のハエトリグモで、友だちのホンチと闘わせるのがおもしろくて夢中でとったものです。四月から初夏のきざしのみえる五月ごろ、男の子は、マサキやバラの生け垣、ささやぶで活動し始めるホンチを、葉の間から息をひそめてさがします。葉陰にホンチを見つけると、帽子をそっと葉の下に持っていき、葉の上からたたくと、帽子の中にホンチが落ちてきます。

とったホンチは、ホンチ箱やマッチ箱に入れておき、大事な一戦に備えるわけです。

●遊びのつきない海

夏は、本牧や間門で泳ぎました。元町公園のプールもいいけれど、遊ぶなら海にかぎります。十二天の海では、潜るとワタリガニがとれ、三溪園の前の浜は遠浅で、アサリ、ハマグリ、マテガイがとれました。拾った貝殻で貝割り遊びに熱中している子供たちの姿が、あっちにもこっちにも見られたものです。

●自然な遊び場をどう残すか

宅地開発や埋立てにより、原っぱや海岸が、住宅地、ふ頭、コンビナートへと変貌しました。

今の大人のほとんどが体験してきた、夢と冒険に満ちあふれた自然の中の遊びを、現代の子供たちにも体験させてあげられるような環境を残しておいてあげたいものです。

これから先、限られた条件の中で、いかに残された緑地部分を開発から守り、自然な遊び場を創り出していくかが、大きな課題といえそうです。

●虫とり

妙香寺や善行寺、相沢の共同墓地のあたりは、カブトムシのいた秘密の場所。横浜ならではのホンチも、友だちと競争でさがしました。

●海で

十二天や三溪園の前に、砂浜が広がっていて、アサリ、ハマグリ、マテガイなどをとったり、拾った貝殻で貝割り遊びに熱中しました。

街の今日

一口に中区といっても、中区の街にはさまざまな顔があります。
にぎやかな商店街、閑静な住宅地、活気にあふれるオフィス街、華やかな観光地、
情緒あふれる下町、外国人の多いエキゾチックな街、そして、横浜を代表する顔……。
中区は、こうしたいくつもの顔をもつ多面体の街なのです。
他都市の人たちは、横浜といえば山下公園、元町、中華街といった
中区の関内を中心とした地域を思い浮かべるでしょう。
でも、それらの地域が中区のイメージかというと、とてもそうとはいえません。
実際、七割の人たちは、それらの地域とは反対の
山手町より南側に住んでいるのですから。
開港によって、いち早く近代的な都市づくりが行われていた都心と、
その影響を受けながら、次第に都市化が進んできた住宅地域。
同じ区内にあっても、それぞれ街のようすには大きな差異があります。
そんな中区の現在を、都市整備や生活面のデーターでのぞいてみましょう。
数字の間から、少しは中区の素顔が見えてくることでしょう。
そのなかから、都市としての基本的な問題をいくつか提起し、
これからの街づくりの主要な課題となっているアメニティー（快適性）の形成について
具体的に検証してみました。

データで見る中区の街

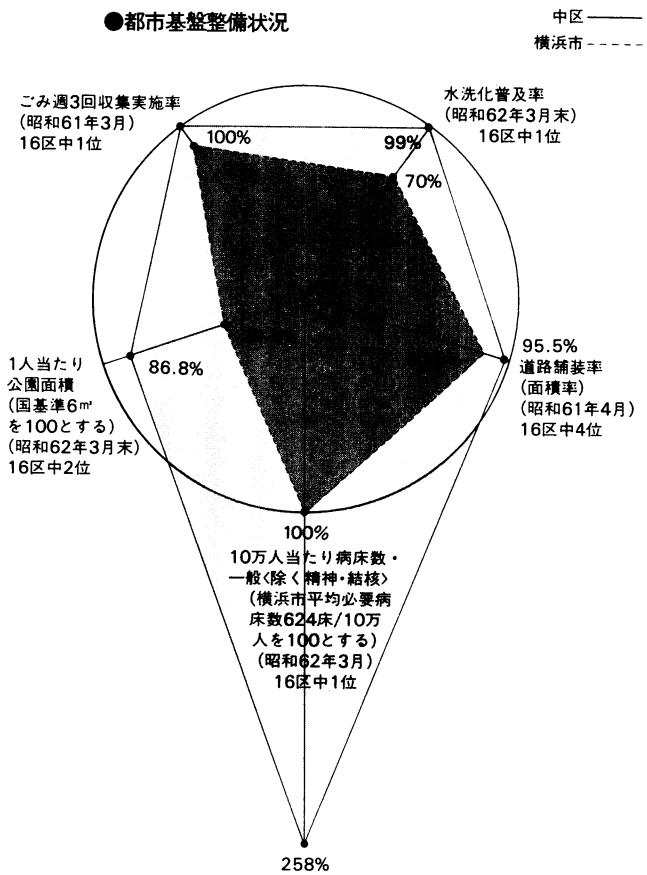
Urban Data Report

高水準の都市基盤整備状況

中区は、下水道、道路の舗装、公園、病院や、ごみの収集といった都市の基礎的な施設や機能の整備状況について見てみると、総合的には横浜市・全一六区の中で、もっとも整備が進んでいると言うことができます。

しかし一方では、地域に密着した小規模な公園や、地区センターのような区民が気軽に利用できる施設が不足しています。

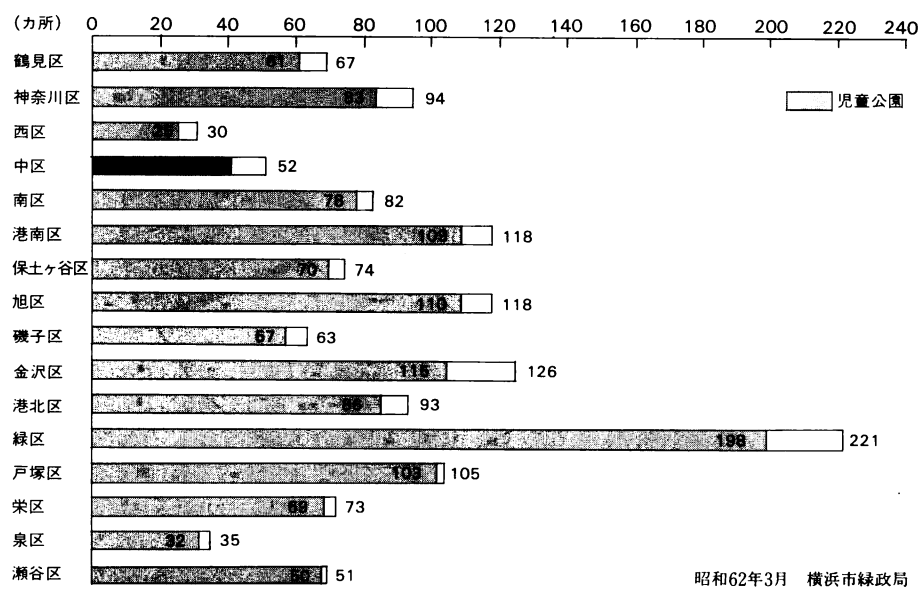
●都市基盤整備状況



地域に密着した小規模な公園が少ない

横浜市の区別公園数とその中に占める児童公園数を見てみると、一六区のなかで中区は全公園数も、また児童公園の数もかなり少ないようです。一人当たりの公園面積は一六区中二位ですが、これは根岸森林公園や本牧市民公園などのように全市的な大きな公園があるためで、気軽に子供を遊ばせるような、地域に密着した公園となると十分とは言えないことがわかります。

●区別公園数



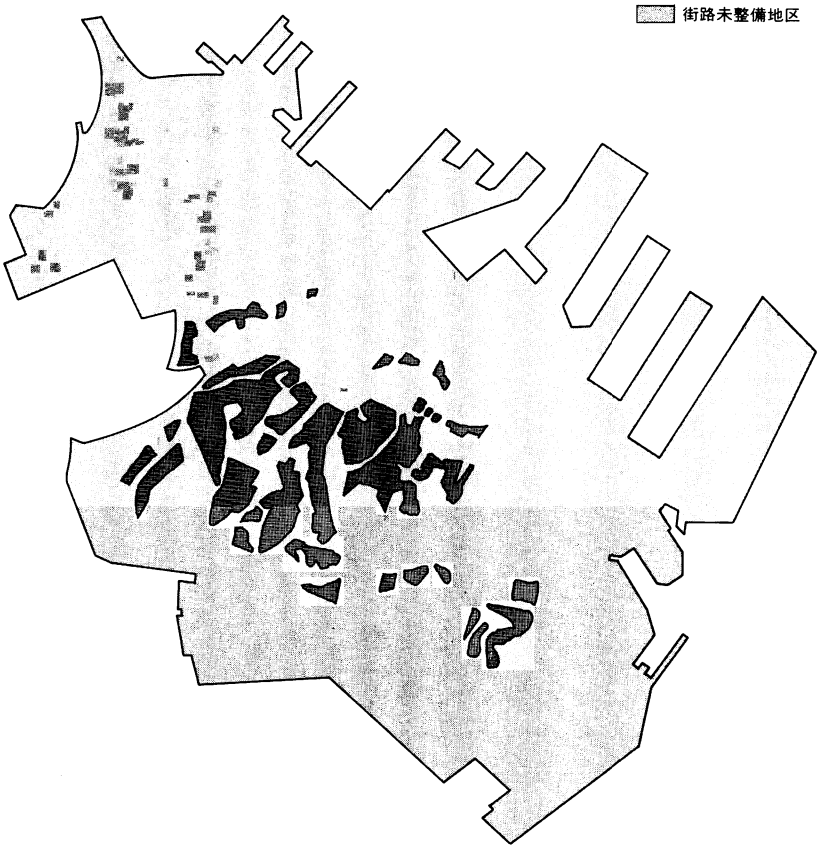
昭和62年3月　横浜市緑政局

Urban Data Report

狭い道に頼る住宅地域

早くから市街化が進んだ中区は、住宅地域に火災や日照などに問題があると考えられる狭い道路に頼る地区が多く残されています。左の図は四ｍ以上の幅員のある道路から二〇ｍ以上離れた地区（公園、緑地、公益施設等は除く）を示したものですが、都心部に比べて住宅地域、特に根岸地区、本牧地区の丘陵部での街路の未整備が目立っています。こうした状況は、家の建てかえや塀の改修時に道路部分を広げるなど、住民一人一人の協力なしには解消することができない問題です。

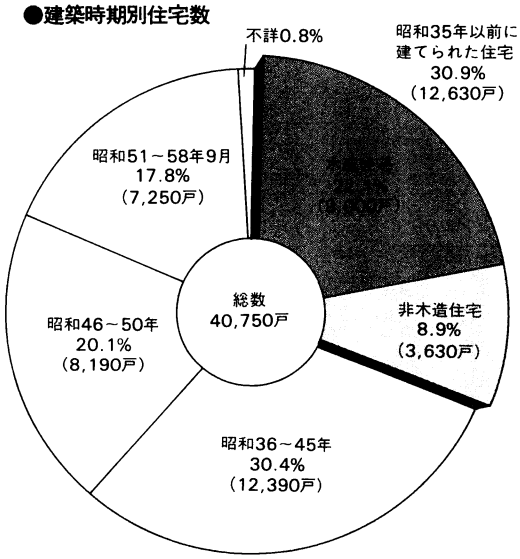
●街路未整備地区図



二割を超える老朽木造住宅

中区の住宅の状況について、その建築時期と種類から見てみると、住宅総数四〇、七五〇戸（昭和五八年）のうち、昭和三五年以前に建てられた住宅が一二、六三〇戸と三〇・九％を占め、そのうちの九、〇〇〇戸、全体の二二％が木造住宅で、中区にはかなりの老朽木造住宅があることがわかります。

●建築時期別住宅数

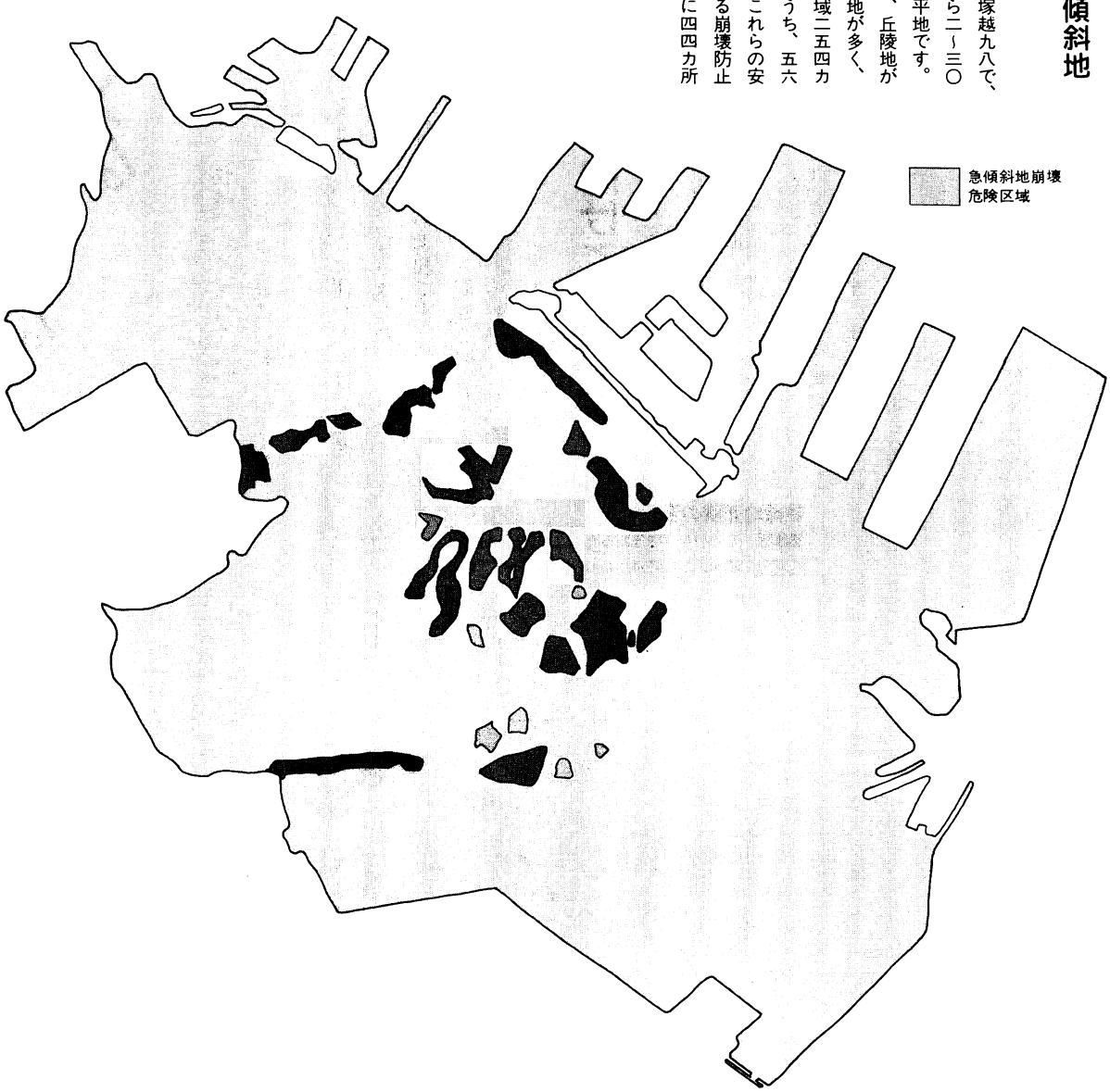


昭和58年　住宅統計調査

住宅地側に多い急傾斜地崩壊危険区域

区内で一番標高が高いのは塚越九八で、海抜五五・二m。でもそこから二～三〇〇m西側は、もう海抜数mの平地です。このように中区の住宅地側は、丘陵地が複雑に入り組んでいるため崖地が多く、横浜市の急傾斜地崩壊危険区域二五四カ所（昭和六二年三月現在）のうち、五六カ所が中区にあるほどです。これらの安全対策として、神奈川県による崩壊防止工事が進められており、すでに四四カ所が工事着手されました。

●急傾斜地崩壊危険区域



うるおいのある街をつくる

都市は、まず人間の住む場として、快適でなくてはならないはずです。ところが、日本の多くの都市は、これまで経済活動を最優先にした都市形成が進んできました。

その結果、街から緑や水辺が姿を消し、そこに住む人々は、無機質でこみ入った街に息づまりを感じるようになりました。

今、都市に求められるものは、経済性との調和です。

二一世紀に引き継ぐ快適な街づくりとして、人間性を回復し、生活のうるおいを育むため、緑と水辺の新たな創造が身近かな活動として始められています。

緑——保存と創造に向けて

街が過密化する前、空き地や雑木林がいたるところにあり、雑草やかん木が茂っていました。そこには、小さいながらも動植物のサンクチュアリができ、葉のざわめきや小鳥や虫の声が人々の心をなごませてくれたものでした。

しかし、都市化の波は斜面地や崖地まで切り開いて、宅地にしてしまい、たくさんの緑を、たちまちなぎ倒してしまいました。さらに既存宅地の狭小化で、希少な緑が一層少なくなってしまいました。

こうして街の表情が大きく変わると同時に、自然から与えられるうるおい、安らぎ、ゆとりといったものの多くが失われていきました。失われてはじめて人々は、緑が快適な暮らしのために欠くことのできないものであることに気づいたのです。

そこで、今ある緑を守り、失われた緑を取り戻すべく努力が、庭

●緑地面積の変化

昭和49年に緑地だったところ(減少箇所)

昭和60年に緑地であるところ

公園以外の緑地(畑も含む)について、昭和49年と昭和60年を比べてみると、昭和49年時点で中区の緑地はすでに少なくなっており、加えてこの約10年間で、かなり減少していることがわかります。

先や街路など、身近なところから始まりました。

●庭に木を植えよう

庭に草木を植え、窓際にプランターを置き、道路には街路樹を植えるなど、生活にゆとりが出てくると、人々の自然への関心が高まってきて、身のまわりで緑化をできるところから進めていこうとする傾向が出てきました。

そこで、建物の新築や増築の際には、快適な住まい環境をつくるため、建築計画と同時に植栽の計画も立ててみてはいかがでしょう。

たとえば、庭木として中木（高さ五メートル～一〇メートル）程度の樹木を選ぶときには、周辺の自然の木や街路樹との調和をはかり、冬の日当たり、夏の木陰を考えることです。さらに〝わが家のシンボル・ツリー〟としてふさわしい樹木になるようにしてみましょう。

また、花の咲く木、香りのよい木、小鳥をよぶ木などを選ぶことによって、季節などの変化が楽しめて、より愛着がわいてくることでしょう。

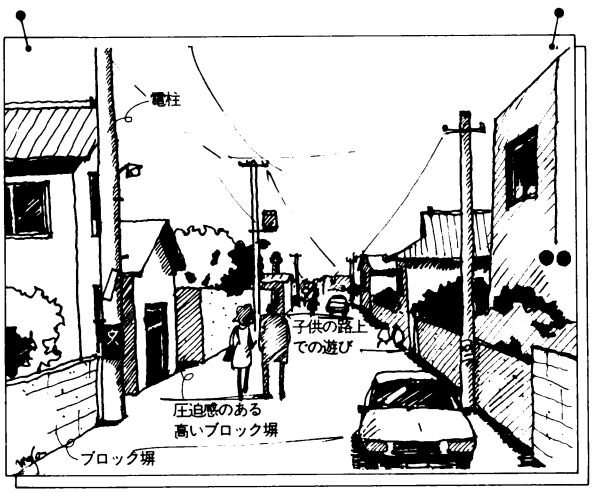
●生け垣にかえて安らぎと落着きを

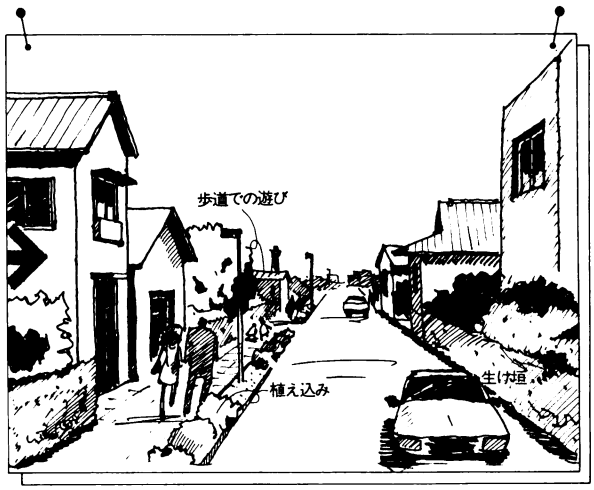
そのほか、隣地や道路との境を、生け垣植栽にかえてみてはいかがでしょう。プライバシーの確保や所有領域の明示のため、これまでブロック塀を建てることが主流でしたが、このブロックは圧迫感があり、かえって狭さが誇張されるばかりでなく、地震時や火災時には危険となります。その点、生け垣は、開放感と合わせて緑の確保にもつながって、一石二鳥の効果があります。自然に囲まれているわけですから、非常に安らぎと落着きも与えてくれます。生け垣は、助成制度もありますので、お隣りと話し合って利用されることをおすすめします。

●歩きたくなる道

中区は街路樹の比較的多い区で、横浜市全体の一三パーセント程

●街の身近なところに緑が増えると





電柱や高さの不ぞろいなブロック塀、車道と歩道が一つになった道などよくある住宅地の街並も、電柱を取り除き、歩道をつくって車道との間に植え込みを設け、さらにブロック塀を生け垣にしてみると、安全性のある整然とした街並になります。

度を占めています。幹線道路から路地にいたるまで、大小さまざまな道がありますが、快適な歩行ができて、歩く楽しさにあふれている道路は、まだまだ少ないようです。もっともっと道の植樹帯に工夫が加えられ、四季折々の変化のある、歩きたくなるような道路にすることが必要です。

しかし、中区には家の立て込んでいるところがたくさんあり、狭い路地が張りめぐらされて、植栽の余地も少なく、緑化はなかなか進みません。

そのようなところでも、窓辺にフラワーポットを置いたり、家の前に鉢植えを並べたり、ちょっとした工夫で快適な路地空間を演出することはいくらでもできるはずです。

いろいろむずかしい問題をかかえている路地ですが、半面、近隣の生活がにじみ出る趣があるなど、歩く楽しさを引き出す格好の場でもあるといえます。

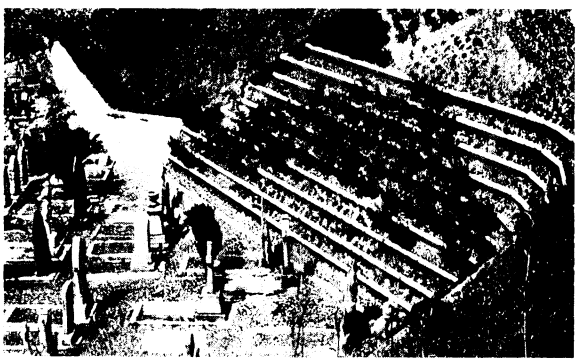
●傾斜地のコンクリートにも緑を

中区にある多くの丘陵地は、今ではほとんどが切り開かれて宅地化されています。そのためにできた崖は、大谷石や房しゅう石などで積まれていましたが、これもすでに風化の目立つところが多くなってきました。

最近は、家の建てかえ時に、より安全性を考えて、間知ブロック擁壁や鉄筋コンクリート擁壁に直されています。しかし、無機質なコンクリートでは、どうしても親しみがもてないという声が聞かれます。そこで、コンクリート擁壁化されながら、傾斜地を緑でおおう緑化ウォールが考えられます。

一九八二年九月の台風で崩れた石川町駅の裏山は、コンクリートの枠で傾斜をおさえ、修復とともに緑化されました。また、山手の外人墓地では、大きめの間知ブロックの中をくり抜き、その中にツツジやツゲなどの株物を植栽する方法を大規模に行いました。美し

●緑化ウォールでよみがえった緑



山手の外人墓地は、大きめの間知石の中をくり抜いて、その中に緑を植えました。

台風で崩れた石川町駅の裏山は、コンクリートの枠で斜面をおさえ、そこに緑を植え込む方法で修復しました。

い緑の壁面は、周囲の自然と調和して、美しい景観を保っています。

●市街化の進んだ街の緑

公園の合計面積を住民の数で割った、一人当たりの公園面積は、横浜市の場合二・一八（市立公園のみ）平方メートルです。中区は、市街化が進んでいるとはいえ、その倍以上もある五・二一平方メートルになっています（昭和六二年四月一日現在）。これは一人当たり二平方メートル弱という日本の平均公園面積の二・六倍で、比較的恵まれているといえますが、これは全市的な大規模公園が多いためで、逆に身近な公園が少ないことが指摘されます。

●ポケットパークの設置

今後、公園というスタイルで緑を確保することは、土地問題と合わせて考えてみると大変困難な事です。また、進む宅地の狭小化、狭い道路の現状などを考えると、緑の面積を増やすのはますますむずかしくなってきています。

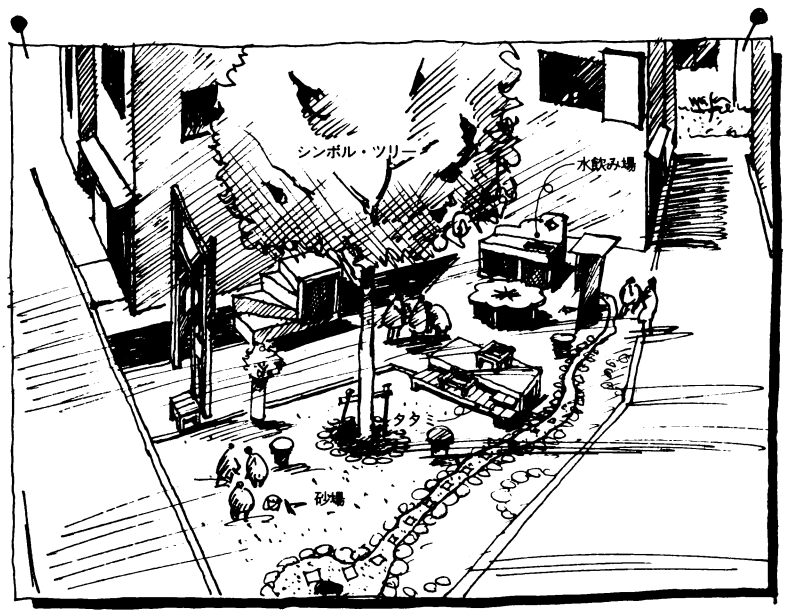
しかし、どんなむずかしい状況の中でも、私たちは豊かな住まい環境を目指さなければなりません。たとえ小さな規模であっても、積極的にコミュニティの舞台となる広場を設けることが大切です。

そこで、最近は、地域のちょっとした空間などを利用した公園づくりが試みられています。それらは、近隣の交流の場、子供の遊び場、さらに夕涼みの場所として利用できるところで、小さいからポケットパークとよばれています。

密集した地域の環境を、少しでも改善しようというのが目的で、使い方や安全性などを考えて、ポケットパークとして適する場所を大まかに決めておきます。その大まかな地域内に宅地や空き地が売りに出されたとき先行取得したり、土地の持ち主に提供を申し出たりして土地を確保します。そして、実施にあたって管理はどうするかなどは、町内会などで話し合って決められます。

このようなポケットパークは、今後増える傾向にあります。市民

●小さな空き地をポケットパークに



100㎡から200㎡ぐらいの小さな空き地を活用して、タタミやベンチを置いたり、植え込みや水飲み場をつくったポケットパークにすると、日常的なコミュニティの場ができます。

の生活に広がりとうるおいが生まれるばかりでなく、街の景観にも非常に効果があるからです。

たとえば、歩行者天国と連係して、広場を拡大していくことも考えられます。

すでに東京・池袋では、辻広場という名称で、テーブルやベンチが置かれ、なんとタタミの縁台まであって、人々の語らいの場として、ポケットパークが有効利用されています。

●緑の管理をめぐって

緑が見直され、増やす努力が続けられていますが、そこから発生する問題も少なくありません。管理にはけっこう人手がかかり、下刈りから、防虫処理、落葉の処理にいたるまで、生き物ですから非常に気をつかわなくてはなりません。

そして、街路樹などがあるために、落葉や木の病気、害虫の発生に悩まされたとか、日当たりの妨げになるとか、苦情も少なくありません。

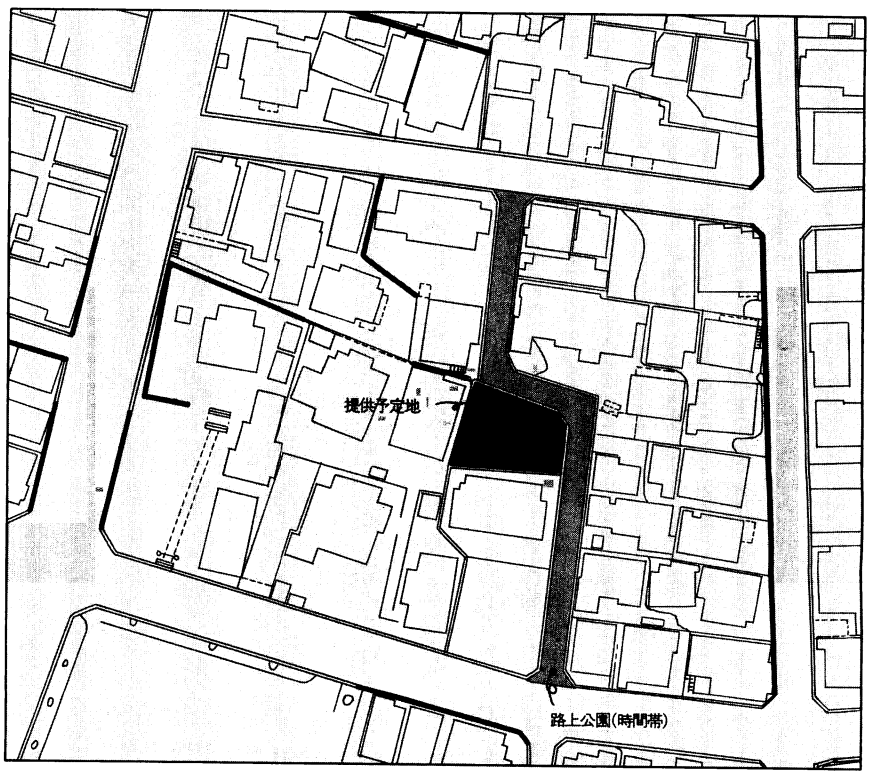
たとえば、あるところではサクラの木に虫がつき、それが気持ち悪いからと木を切らせてしまったケースがあります。また、街路樹が街灯を隠してしまうため、防犯上、風紀上好ましくないからと、木の伐採を要求してくることもあります。

緑の管理については、なかなか手がまわらないのが実情です。たとえば、中区区民意識調査によると、地域の公園や子供の遊び場の掃除・草とりなどの管理について、二三パーセントの人は市が管理すべきであると答えていますが、しかし、六三パーセントの人たちは、地域で協力すべきという心強い意見もあります。

人と人、人と地域の結びつきが薄れている現代に、人々の共生の意識が、住みよい街をつくっていく原動力であることは間違いありません。

今一度、住みよい街づくりに向けて、地域と行政の役割分担について考えてみたいものです。

●ポケットパークをつくるなら



ポケットパークは、上の図のように住宅が密集し、狭い道路に面した地区で効果的です。この道路を時間帯で歩行者専用にすることで、ポケットパークと道路が一体になった安全な遊び場とすることができます。

川と海――親水性を求めて

古い時代には、水の存在は都市の大切な骨格をなし、生活用水や灌漑用水になったり、物を運搬したり、生産活動と密接にかかわってきました。

けれども、時代の進展とともに、こうした川や海の役目の多くは終わりを告げました。

関内地区には掘割川がめぐり、山手、北方、根岸などの丘のふもとには清水が湧き、水と私たちの生活とは切っても切れないほど、深いかかわりがありました。

しかし、今では掘割川もほとんどが埋立てられ、公園や道路になっています。残った大岡川、中村川～堀川の川辺も、治水工事によりコンクリートの切り立った護岸に姿を変えてしまいました。さらに、千代崎川のようにふたをしてしまった川もあります。

また中区の海岸線沿いは、かつて目の前に波が寄せ、砂浜で遊ぶことができたものでした。

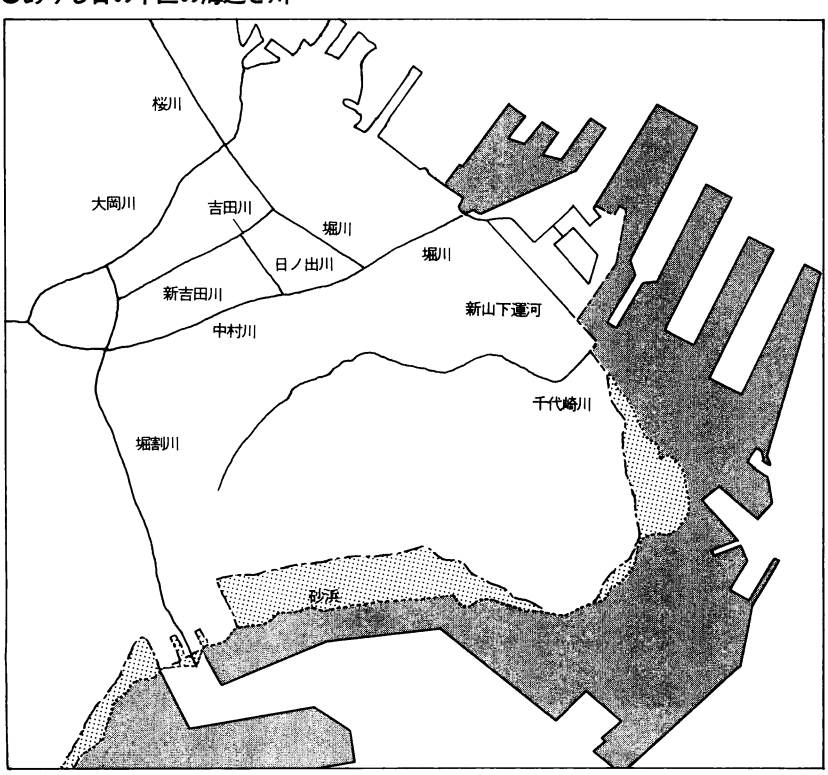
それが今では、浜辺は埋立てられ、その埋立てでできた海岸線も工場の敷地に取り込まれ、ますます手の届かないところにいってしまいました。

そして、水辺から遠ざけられた人々は、すっかり水のことを忘れてしまったかのようでした。水質は悪化し、ゴミが浮き、川も海も汚れてしまいました。

しかし、人と自然を引き離した都市化は、やがて人々に焦燥感をもたらしました。人々は自然の安らぎを水辺に求め、その復活に力をいれ始めたのです。

都市設計においてアメニティー(快適さ)のひとつとして、ウォーターフロント（水際線）を大切にしていることからもわかるように、結局、生命の源でもある水に安らぎを求めています。

●ありし日の中区の海辺と川



昭和15年から20年ごろの中区には、たくさんの川がめぐり、根岸から本牧にかけて、自然の海辺がありました。

よりよい現代の文明を築き上げるためにも、人々の失った人間らしさを取り戻すためにも、アメニティー空間の創造が今、全国的に見直されています。

中区でも、街の魅力づくりを担って、今、旧貯木場界隈の有効活用など、ウォーターフロントが注目されています。

●遊び心で川とつきあう

日本で最初のボート遊び場ができたのは、大岡川流域です。毎年一〇月末、大岡川で開かれる「カヌーフェスティバル」は、年々参加者が増えています。一度参加した人は次の年も、またその次の年も参加してしまいます。

それというのも、街を流れる川で、街の人の声援を受けながら漕ぐ楽しさは、こたえられないからです。

カヌーからは街の人の顔が見えるし、川岸からは漕ぎ手の表情がわかる——大岡川水域は、地域規模の大会にはちょうどよいスケールなのです。

はしけにつないであるだるま船を横に見て、日常とまったく違う雰囲気の中で川を下ってゆきます。そして潮の香りを感じたとき、急に河口が広がり、目の前には広大な海が待ちうけているという、感激と満足感を同時に味わうことができるのです。参加者の多くは、この興奮が忘れられず、また次の年もやって来るようです。

●山下公園前の海底大清掃作戦

近ごろ、山下公園前の海がきれいになったという話をよく聞きます。『海をつくる会』が毎年一回行っている山下公園前の海の清掃など、地道な努力の成果が現れてきたのです。

清掃すると、海底から空き缶やらビンやら、さらにテレビや自転車など、大小さまざま、実にいろいろなゴミが大量に出てきます。一回の清掃で一〇トンものゴミが出てくることもあるのですから、公衆道徳の低さを感じないわけにはいきません。ところかまわず捨

●大岡川のカヌーフェスティバル

毎年10月末に行われる大岡川のカヌーフェスティバルは、遊び心で川とつきあう楽しさから年々参加者が増えています。

てられるゴミによって、川や海は汚され、水辺はとんだしわ寄せを被ってしまいます。

しかし、この山下公園海底清掃大作戦も七回を数え、年々盛り上がりをみせています。

そのかいあって、市民に親しまれる山下公園前のきれいな海として、話題になるほどに回復しました。

この清掃活動は、現在『海をつくる会』の三〇人ほどの人々が中心になり、一般参加のダイバーとボランティアとで一日三〇〇人ほどが参加して行われます。会員たちは、みな愛郷心に燃え、「横浜の水辺が自然の姿を取り戻すまで、この清掃活動を続けます」と、強い決心を語っています。

●自然のやさしさの中へ

最近、川や海などの水辺に目を向け、耳を傾ける人が増えています。夕涼みの会、クリーンフェスティバル、〇〇川プロムナードなど、水にまつわるイベントが多くの人々を共鳴させ、その輪が広がっています。

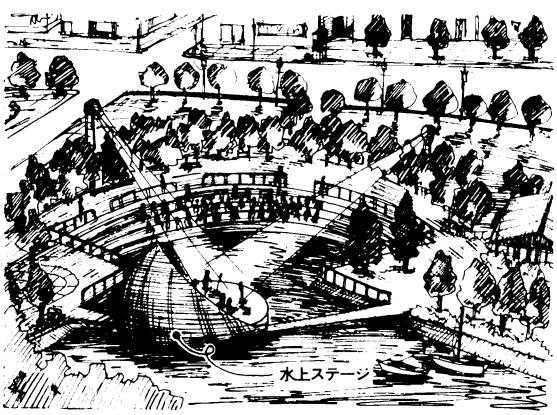
自然には、厳しさとともに人を包み込むやさしさがあります。人の手によって失われつつある自然のそのやさしさに、今度は人が救いを求めているとしたら、皮肉なものです。

そもそも中区は、横浜港をかかえ、海から発展した街といえます。区民の中にも、中区のイメージを「港・海」と答える人も少なくありません。

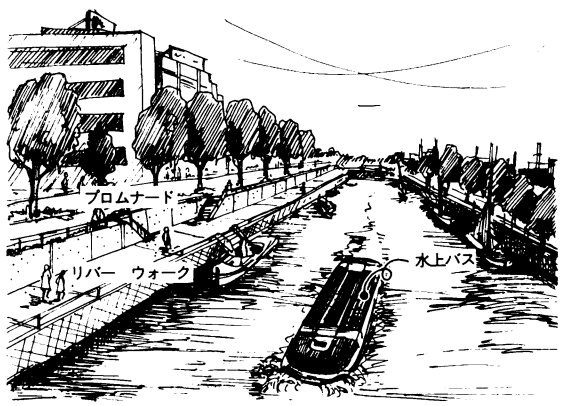
区民のふるさとに対する愛着は、水を媒体にして深められていったことは、想像にかたくありません。

全国的にウォーターフロントが見直されるなか、一度は失いかけた水辺のうるおいを、今一度よび戻そうという気運が区民一人一人のなかにも高まり、あらゆるところで表面化してきています。

●親しめる水辺のイメージプラン



大きな水域がある川や水たまりでは、そこを水上ステージなどのイベント施設として活用すると、水と緑に囲まれた憩いの場をつくることができます。



川岸に木を植えるとともに、土手や川床の一部を利用した水辺に近いところに散歩道をつくります。また、川面には水上バスを走らせて、川も交通手段として活用することができます。

●座談会 中区の明日をこうしたい

よい街、暮らしやすい街とは、どんな街なのでしょうか。商店が充実していて、交通が便利で、ふれあいのある街――。その中にも、中区らしさを残したい。

「街をこうしたい」というテーマで、地域の主人公ともいうべき主婦、商店主、街づくりプランナーの若手の方々にお集まりいただき、中区の将来に向かっての街づくりを活発に語っていただきました。政治的にも、観光地としても、横浜市の中心的な存在である中区。山下公園、元町、中華街などのにぎわいにともなって、住宅地域も徐々に様変わりを見せ始めています。それぞれの立場で感じた思い出を重ね合わせながら、これからの中区に期待することを考えてみました。

ハマッ子の誇り。いつか戻ってきたくなる街。

司会●今日は中区に住んでいらっしゃる方々にお集まりいただき、中区における暮らしやすさ、環境などについて、いい点も悪い点も含めていろいろお話いただきたいと思います。

まずはじめに、みなさんにとって中区はどんなところなのか教えてください。

嶋田●祖父の代から三代、中区で生まれ育っていますので、ハマッ子を自認していいんじゃないかと思います。これは非常に誇れることで、一〇代、二〇代のころ、東京をはじめ他の地域の方と知りあったときなど、「横浜に遊びに来ない？」と誘うと、みんなイソイソとやって来たものです。でも、今はその横浜のイメージが下がってきているように思えるんです。

山本●私も一五年前に仙台から嫁いだときは、わざわざ仙台から横浜へ買物に来るお友だちもいました。センスのよい服など、元町で買ったのよって自慢できましたね。

宝田●確かに、昭和三〇年代くらいまでは、横浜らしさがありました。港の通りには外資系の支社が並び、その重役クラスの外国人が山手に住んでいたんです。米軍の将校も住んでいて、その人たちが、元町とか伊勢佐木町とか山元町とかで買物をしていたわけで、これらの商店街にいろいろな影響を与えていました。その人が買う商品といったら、まだ当時の日本人には買えなかった物ばかりでしたから。そういう物を商店でもそろえていたんです。

だから、東京や湘南から、ハイクラスの人たちが、その商品を求めて、横浜へ買いに来ていたんです。これが、よそから羨望された横浜だったと思うんです。でも、今はそんな時代じゃない。

押谷●でも、雰囲気は残っていると思うんです。実体があるのかはわからないですが、なんとなく格好いい。車でも横浜ナンバーが格好いいというように。そのイメージは消したくないですね。中区は横浜の中心という感じです。

それから、都会の真中にいながら海が見えるところも好きなんです。首都高速で東京から帰ってくると海が見えてくる。横浜が近いなって気がして、なんとなくホッとします。

嶋田●そう、心情的に帰りたくなる街であるんですね。私は平沼高校の卒業で、主人は埼玉の人なんです。高校の同窓会名簿を見ると、今でもけっこうみんな横浜周辺をうろうろしているんです。主人の同窓会名簿を見ると、あまり埼玉に残ってない。東京からの距離でいえば変わりないのに、横浜の人は帰ってくる傾向が強いようです。

明城●まったくその通り。一〇〇年たらずの歴史だけど、横浜が人間にしみついている。いったん東京に出た奴でも戻ってきますね。建築屋をやっていて、横浜を出て地方に住もうとする人には出会っていないですから。

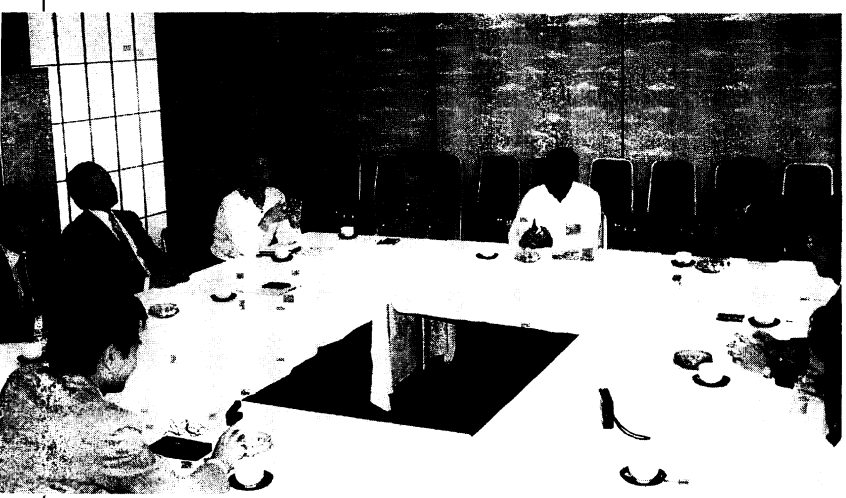
横浜駅周辺と対抗する商店街の生き残り策

司会●ところで、宝田さん、押谷さん、蓑島さんは、それぞれ元町、伊勢佐木町、山元町でご商売をされています。中区の代表的な商店街ですが、その現状を順にお話いただけますか。

宝田●元町は、イメージ先行型で、みなさんが思っているほど楽な商売をしているわけではありません。なにしろ、そのイメージに合った商品を扱っていかないと、立地条件だけを勝負にしたら、西口・東口、あるいは渋谷などに対抗できないですから。かつては横浜に来ないと買えない品物があった。なぜかといえば、物流はここの港から全国へ流れていたのですから。開港にともなって、外国人が住み、その国際性が買物のなかにも反映されていましたが、現在は必ずしもそうではない。しかも航空貨物ができ、物流の基地は羽田の方へ移ってしまった。イメージはずいぶん変わってきて、これは商店街の責任じゃないけど、個々の店で扱っている商品の魅力がなくなっているのは確かです。

押谷●伊勢佐木町は古い商店街で、だいたいの店が自分の土地を持っている。だから、あまり苦労しなくても食べていけるんです。元町のように店を借りて利益を上げないとまわっていかないというのとは違って、おじいさん、おばあさんがやっていて、息子が東京に勤めに出て、裏には家作があってという具合ですから、けっこうぜいたくしても楽に暮らせるところが多いんです。だから、ハングリー精神に乏しい。商店街を新しくしようという話がもち上がっても、金がかかるから、すぐやめようヨってことになるんです。街全体を魅力的にしたり、活性化したりするには、完全にマイナスですね。

蓑島●私たち山元町の商店街は、生鮮食品に強い商店街ということで通ってきたのですが、最近は、昼間の人口が減って、問題になっています。昼間いるのは、お年寄りか子供。奥さんたちはパートに出て、伊勢佐木町や西口の方へ行かれるものだから、勤め先の近所で買って帰る人が増えているようなんです。そうでなくても、そういう奥さんが帰ってきても買物ができるように、商店街としては、夜遅くまで開けておかなければならなくなります。最近は大手スーパーが三軒もできた。二四時間営業のところもあって、お客さんはみんなそちらへとられてしまいます。



司会●なるほど。今度は女性の方から見て、買物をするにはどういうお店が魅力的なのでしょうか。

嶋田●主婦でいながら一方で仕事をしてますもので、仕事で出た日は、関内のデパートの地下とかスーパーで買物をするのがパターンですね。でも、家にいる日は地元で買ってます。そのときいつも不安になるのは、カマボコなど、かなり古い物を売っていることもあるということなんです。

山本●私はほとんど地元で買いますね。大きな物を買うときとか、食事に行くときは、横浜駅や元町に行ったりしますが、そこでおかずまで買ってくるのは、重い思いをするだけなんです。地元の良さは、もうすっかり顔なじみになっていることです。けっこう近くにスーパーができていたりするんですけど、家族のおかずの材料は、野菜でも魚でも、普通のお店からほしいですね。昔からあるお店で、個人的な会話をかわしながら買う方が私は好きなんです。うっかりサイフを忘れても、売ってくれたりしますし。

蓑島●横浜駅周辺には、デパートだけでも三、四軒ある。喫茶店もあるし、食堂もある。買物ば

かりでなく、遊ぶところもあって、あそこへ行くと一日楽しく過ごせるわけなんです。ところが私のところの山元町では、商店街をぬけるとあとは何も続かないんです。伊勢佐木町も通りぬけると、あとは官庁街しかない。元町も、元町で買物をして中華街へ行って、港を観光したら、あとは次に続かないんです。

宝田●個々の商店街が、もっているマーケットがどこにあるかをしっかり考えなくてはいけないと思うんです。元町では、中区のお客様だけでは商売が成り立たないんで、かなり商圏が広く、二時間の商圏をカバーしています。二〇代のお客様は、そごうとバッティングしています。渋谷という競合もある。三〇代、四〇代の主婦層は、高島屋さんに行くようです。なぜかというと、交通体系が、西口の方がターミナルの駅だから。やはり行き慣れているところへ行くのが消費者の行動で、元町をより立地を良くしていくには、集まってくる要素を作り上げないといけない。車で行くには、やはり元町は駐車しにくいですし。

街に緑を増やす工夫

宝田良一さん
元町で洋食器販売店を経営　青年会議所の特別理事で、各商店街の現状に精通する　ボストン大学卒　元町生まれの元町育ち　中区で好きな場所は八聖殿　家族は妻、二男、一女　三九歳

山本●山元町は、山手通りからずっと来て、森林公園への通り道になっているんです。最近はふだんの日でも若い人たちが観光に訪れて、ずいぶん道を聞かれました。元町で買物をして、ドルフィンで食事する人が多いようです。そうすると、山元町がポツンとぬけた感じになるんです。地元に密着していながら、よその人が描くシャレたイメージとはかけ離れているんです。

森林公園には、たくさん人が集まってますから、あそこに図書館でもできたら、地元の私たちにもメリットがあると思うんですが。

蓑島●それから、緑を増やす運動とかいいますが、うちのほうは逆に緑が多すぎて困っちゃってるんです(笑)。はっきりいって、森林公園なんてあんなに木を植える必要はないと思います。何も施設がなくて、ただ子供たちがゴロゴロころがって、それがいちばん楽しいんだと思うんです。行政は、森林公園だからって木を植えなければいけないと考えているようですが、そうすると遊ぶところがだんだん縮められちゃうんですね。できた当時の緑で十分なんです。それをまだ増やしている。

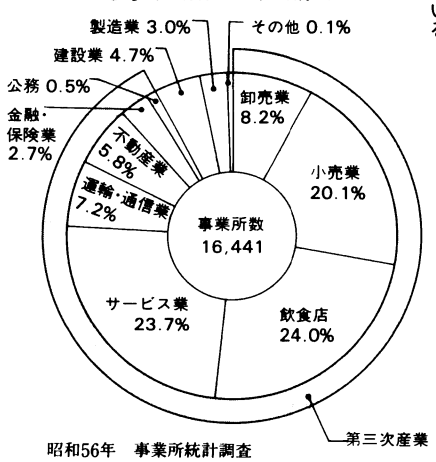
鳴田●そういうお金があるなら、山手や本牧に

データで見る中区の商業 Business Data Report

中区は商業の街

中区には、横浜市内の一四・六%を占める一六、四四一の事業所があり、一四区中第一位となっているが、この産業別内訳を見ると、第三次産業が九二%と大部分を占め、なかでも商業(卸売業、小売業、飲食店)が半数を超えている。

●事業所数の産業別構成比



昭和56年　事業所統計調査

緑地を買ってほしいですね。今、傾斜地がどんどんコンクリートで張られているでしょう。あれは暑いんですね。中区の良さは、いわゆる人間の住むところに必ず緑があったわけ。それがなくなりつつある。つくる事も大切だけど、ある緑を守るのに、何かいい案はないかなと思う。

司会● 緑化ウォールというのが使われているところがあります。コンクリートの枠で斜面をおさえるわけで、その枠の中に緑を植えるんです。外人墓地などで実施されていますが、まわりの自然と調和して、緑の保存にも非常に効果を上げているようです。

明城● あと具体的には緑を残すのに生け垣がよい案だと思います。戦後はブロックとフェンスで囲ったり、中が見えないようにしたけど、最近はセキュリティー（安全性）も万全だし、幸い日本は防犯上は安全だしね。助成金も出るし。

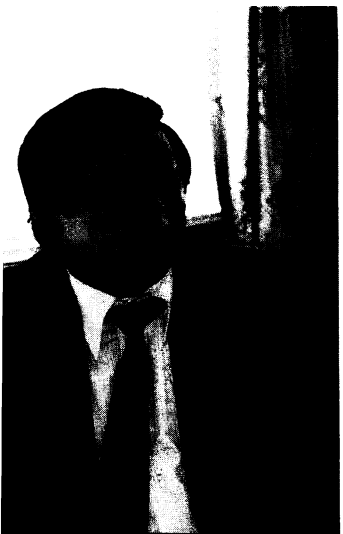
区民に使い勝手のいい公共施設を

司会● 集会場とかコミュニティセンターは活用なさってますか。

山本● うちの山元町のほうの地区では学校をよく使います。もちろん、公共施設でもある学校を大いに活用するのはいいのですが、もっと遠慮なしに使える施設ができないものでしょうか。あの辺は非常にサークル活動が活発なんですね。でも土曜日、日曜日だけなんです。主婦としては、ふだんの日にもっと利用できたらと思うんですが。

嶋田● 中区にはコミュニティセンターが非常に少ないと思うんです。地区センターやコミュニティセンターとしては野毛に一館あるだけですから。今度図書館ができるというので、期待していましたら、新本牧だというんです。新住民の一二、〇〇〇人のためみたいなのね。旧住民は、いったいどうしてくれるんだという感じになりますね。公園も港の見える丘公園とか山下公園とか多いんですが、それは住民のためのものじゃなくて、観光施設なんです。私が子供を育てていたころ、近くに公園がなくて困ったものでした。どこで遊ばせたらいいのかと。

宝田● よく中区からはスポーツ選手がでないといわれますね。何といっても小学校のグランドが狭い。まあ、グランドといえるものは間門小学校くらいで、あとはボール遊びもできない学校がほとんど。子供たちが伸び伸びできるとこ

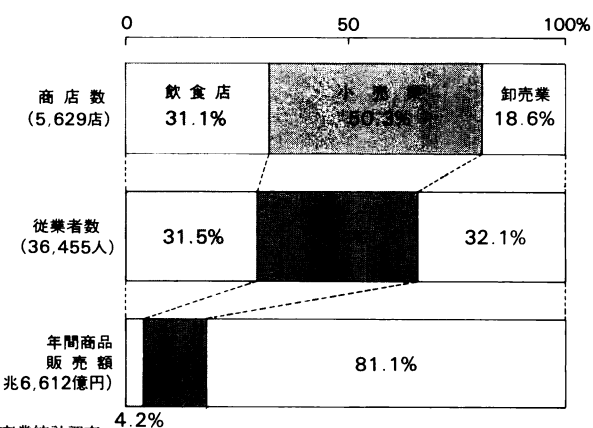


明城佳明さん
明城建築設計事務所代表、公園等、街づくりに関心をもつ　横浜の交通未整備を鋭く指摘する　自身の性格は自身では不明と答える（あらゆることに関心あるようす）日本大学卒　中区で好きな場所は横浜港大桟橋とかつての中華街の場末のバー　家族は妻、三女　四五歳

商品販売額では卸売業が主流

大きな商店街がいくつもある中区は、商店数では小売業が半数を占めているが、従業員数や販売額では卸売業の割合が高く、特に販売額では小売業の一五%に対して卸売業が八一%もの高率になっている。

●商店数・従業者数・年間商品販売額の業種別割合



昭和60年・61年　商業統計調査

※飲食店の数はバー・酒場を除く。

ろが、どこにもないんですね。元町プールなども、子供が利用するには料金が高すぎますしね。

明城●新しいコミュニティセンターを新本牧につくるということなんですが、その他の地域の人には恩恵がないとする考えは、すべて交通の便の悪さからなんですね。便が悪いために、近くの人はいいけど、ちょっとでも離れた人はダメになる。

横浜は、これだけの都会でありながら、交通網は非常に未整備です。地下鉄が一本きりない。こんな大都市はほかにないんであって、どんどん穴ぐらへ入っていけばいいと思います。特に中区は、麦田のトンネル以南は、電車一本ですからネ。そこからまず解決していかないと。最近は、東京都横浜村的な人種が増えてきた。交通が全部東京方面へ向かっているんです。横浜市内のある市街に住む友人が言ってましたよ、中区へ行くより、東京へ行くほうが早いと。

宝田●本当に、中区に欠けているのは交通ですね。先ほど区内の施設や公園が観光施設だとか言われましたが、区民が使ってもいいわけなんですから。文化的な施設もいっぱいある。交通さえ解決すれば、暮らしやすさはそうとう違ってくるはずです。中区の環境は非常にいいし、人種も昔から外国人を受け入れてしまう人なつこさがあるし。そういう意味で環境は非常に素晴らしいわけだから。

明城●ただ、日常生活の公園は、山下公園のような観光的なものだとうまく使えないですよ。日本人ってものは昔の長屋の井戸端程度ですと何となく人が集まるけれど、もっと広くなっちゃうと、居心地悪いんじゃないかな。

嶋田●地域の中での施設というのは、広さとか美しさじゃなくて、使い勝手なんでしょうね。

それと、これからは車社会になると思うんです。中区の公会堂である開港記念会館というのは、車がダメ。停められないんです。そんな公会堂ってあるでしょうか。しかも電車からは遠くてバスしかない。どんどん車で生活する時代になるというのに、その対応が不十分なんですよね。

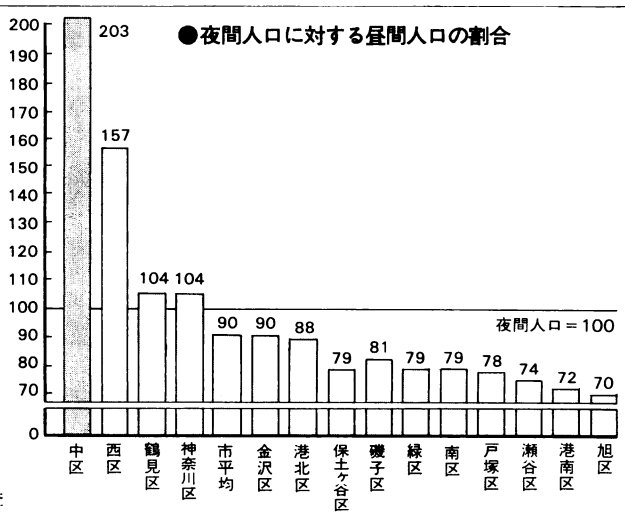
山本●山元町には、少し路地をはいると昔の駄菓子屋みたいなのがあり、子供たちがワッといておでんなどを食べたりする店があるんです。いろいろ開発して、街並も変わってステキになるのはいいけれど、何かあまりにもイメージが

嶋田昌子さん
主婦、県立新羽高校国語講師　中区の元社会教育指導員、婦人活動等でも幅広く活躍　日本女子大学卒　中区で好きな場所は三溪園、昔の間門・本牧海岸　家族は夫、三女　四六歳

Business Data Report

昼間二倍にふくれあがる人口

横浜市の中心区である中区は、昼間の人口が約二四万人と、夜間(中区に住んでいる)人口の二倍にもふくれあがる。これはおもに、区外から通勤・通学してくる人のためで、横浜市の中でも群をぬいている。



昭和60年　国勢調査

違いすぎて、今までの良さがなくなるのもわびしい気がします。こうしたものを大切にしたいですね。

宝田●しかし、今、本郷町、本牧、山元町などに住んでいるのは、老夫婦がほとんどで、子供たちは出ていっているから、高齢化してきているんです。早めに再開発するとかして、若い世代をいれないと、いくら商店街が、がんばっていい商品を置いても、そこに住んでいなければ意味がなくなります。

蓑島●三〇代の人たちだったら、何かしようという発想はもっているんです。ただ、山元町では道路の拡張計画に入って、線が引かれているものですから、ビルを建てるにしても許可されないんです。ほとんどの家は、奥行きがせいぜい四～六間で、狭いところだと三間くらいのところもあって、線の内側というとなくなってしまう。それが街づくりのネックになっています。

明城●中区の商店街は、商業ゾーンの意味はあっても、共同でやろうとすることが非常に少ない。自分の土地で商売をしている人が多いこともあって、わりと苦労が少なくてやっていけるものだから、自分の財産を自分で守っているだけでいいというわけです。それを何倍にもふくらませる意識はない。仮りにビルにしたくても、計画道路にあたっているから建てかえもできない。だから、共同ビルを建てようというのは、非常にむずかしい。そういう意識がないんですね。いっしょにやるとなると、ある程度他人に家の中のことをさらけ出さないとできないからなのか。東京ではもうあたりまえのように行われていることなんですが、中区をはじめ横浜はそういう面では閉鎖的ですね。

司会●利用したくなるような施設をつくり、それらを利用してくれる人たちが住んでいる、そういう街にしなくてはならない。しかし、今はギューギューで開発の余地もないくらいです。明城さんにお尋ねしたいんですが、このような状態のなかで地域をグレードアップさせるのは、どうしたらよいのでしょう。

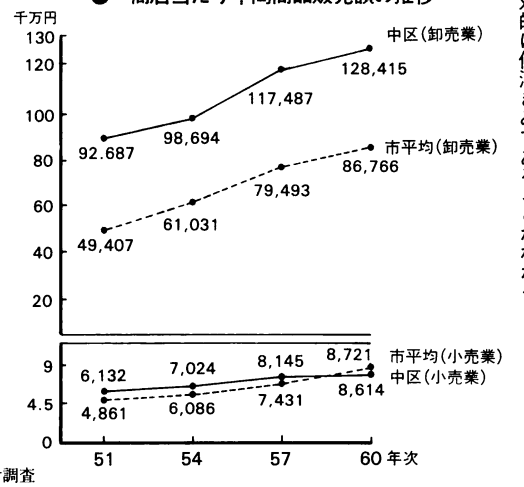
明城●既成の市街地というのは非常にむずかしい。起きては困るんだけれども、大規模な地震をきっかけにでもしないとできないんじゃないかと思うんです(笑)。そのとき、行政が街を整備できるかどうかにかかってくるんですけど。冗談でなく、そういうことがない限り、トンネ

蓑島　興さん
山元町で寝具店を経営。山元町商店会青年部長として活躍していたが、年齢のためおりる。町内野球で活躍。九年間、ママさんソフトボールの監督も。県立横浜平沼高校卒。中区で好きな場所は外人墓地、横浜スタジアム。家族は妻、一男、二女。四六歳。

停滞ぎみの中区の商業

昭和五一年から六〇年までの、中区の一商店当たりの年間販売額の伸び率は、卸売業が三九%、小売業が四一%となっているが、横浜市平均の伸び率・卸売業の七六%、小売業の七九%を大幅に下回っていて、中区の商業が相対的に停滞ぎみであることがわかる。

●一商店当たり年間商品販売額の推移



商業統計調査

ルから南の住宅街を整備しようとしてもむずかしいですよ。それこそ消防自動車も入れない密集地帯がたくさんあるんですから。

そんななかでも、工夫次第ということがいろいろあると思うんです。たとえば、街路修理など、三年に一度やるところを五年に一度に延ばし、その余剰予算を旧市街地整備にまわすとか、浸透性の舗装など、グレードの高いものにしていくとか。こういうことは、いろいろな面で可能でしょう。

横浜らしい文化を引き出そう

嶋田● 横浜は何か中心的なものをもっていないと。東京従属型では人々はいずれどっかへ行ってしまうと思うんです。国際性を打ち出しても、経過都市でなく中心地になれる魅力をもたない限り、一時的なものになるのではないでしょうか。

押谷● かつては、中区に住んでいる人のライフスタイル自体が魅力にあふれていたんですよね。

宝田● ファッションでも、横浜から広がったといわれた時期があった。覚えているのは一九六〇年代、靴下の見えるくらい短いズボンが流行ったことがありました。また、七～八年前に、ハマトラ・ファッションというのが流行りました。あれはフェリスの女生徒が、坂を上って学校へ行くのに、足がくたびれてしまうからひざ下までの靴下を履いて、ペタンコの靴を履くようになったんです。スカートも、狭いのでは歩きにくいから広がっている。動きやすいようにトレーナーを着ている。これがファッションで、湘南でも同じように海のファッションが流行ったことがある。そういうライフスタイルからあえて仕掛けると、中区にはまだまだたくさん魅力があるのじゃないかな。

明城● 僕が学生時代のことですが、中華街の場末に外人バーがあったんです。そこには船乗りがいて兵隊がいて、黒人も白人もいた。日本人は入りにくかったけど、何となく入って、そこで酒飲んでバカ言ってました。怪し気な英語でも何とか通じるんです。片わらではジャズがガンガン鳴って、それが横浜のかつての姿だと僕自身は思う。それが今はなくなっているんです。

山本● 結婚して、仙台からこちらに来たとき、さすがだと思ったのは、八百屋さんや果物屋さんのかなり年配のおばあちゃんが、外国人のお客

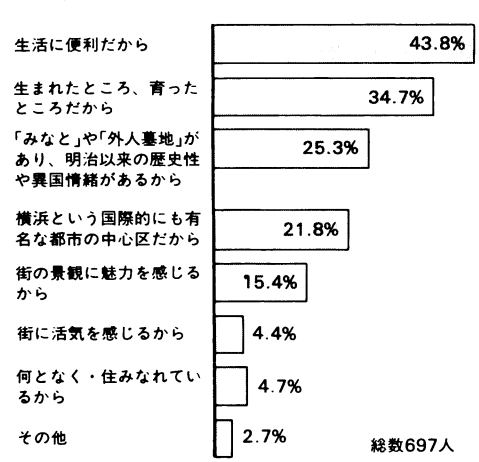
山本久子さん
主婦　山元小学校PTA副会長　宮城県仙台市出身　結婚後中区へ　手芸や料理が好きで、中区女性フォーラム「女の考える街づくり」に参加　仙台・私立常磐木学園卒　中区で好きな場所は港から山手近辺、森林公園　家族は夫、一女、一男　三八歳

Business Data Report

九割の人が中区に愛着心をもつ

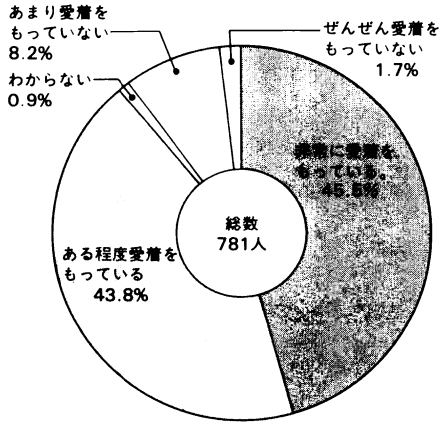
中区民の区への愛着度は、「非常に愛着をもっている」人と「ある程度愛着をもっている」人を合わせると約九割にも達し、極めて強いといえる。

●愛着をもつ理由



総数697人

●中区に対する愛着の程度



昭和57年　中区区民意識調査

さん相手に商売していたことですね。横浜だなって、びっくりしましたね。

蓑島● 十分な会話はできなくても、売ったり買ったりはできるんですね。外国人に対して違和感をもってないからでしょう。

宝田● 中区は歴史的には国際文化都市です。今騒がれている国際性について可能性をもっているのは中区です。学校も中華学校がある。インターナショナルスクールもあるし、外国駐日大使館に勤務する人のための米国国務省日本語研修所というのもあるんです。また、今年からアメリカやカナダの大学生のための日本研究センターが東京から桜木町に移転しました。クラブにしても、山手には、メンバーが一つの国で一割を超えないように、いろんな国のメンバーを集めるところがある。

再開発をするところにも相当数の国の人が入って来るようなので、新たな文化を作り上げていく可能性がある。こんなことが、中区の将来をにぎっているのではないでしょうか。

押谷● 私も同感です。外国人が自然に住めることは、横浜の過去からもっているいいイメージです。ファッショナブルだとか、ハイカラだとか、そういう良いイメージを自然に残すには、どうするのがいちばんいいのかと考えると、今まで議論されていた交通とか、水道とか、道路とか、そういう基礎的な問題を解決しても、それだけでは中区の特徴づけにならないと思うんです。他の都市では得られない特徴づけが必要だと思います。いろんな語学が学べるとか、料理店もどこでも自然に外国人が入れるとか、標識を英語と日本語とダブル表記するとか。

大々的な計画を実行するのは大変です。でも、個々の商店でも、強烈なインパクトのある店なら、街を引っぱっていくことにつながる。全体の開発は、大変だということでなかなか始まらない。個々の努力でできるところから進めていくべきではないでしょうか。

司会● みなさんは中区に対してそれぞれの思いや期待をおもちのようですが、しかしそれも中区への愛着心からということでは、共通しているように見うけられます。こうした気持ちがこれから形になるよう、区民一人一人の努力が期待されます。

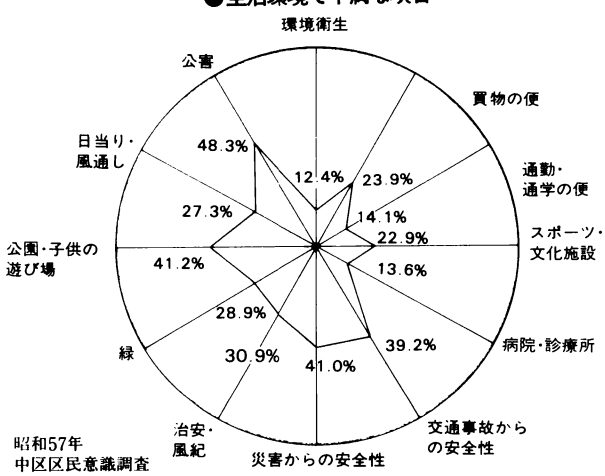
今日は、お忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございました。

押谷哲夫さん
株式会社ヒクトリア専務　横浜の地場産業であるスカーフ、アパレル等を扱い、小売店を伊勢佐木町に出す　青年会議所政策室所属　東京大学卒　中区で好きな場所は山下公園　家族は妻、二男、一女　三六歳

生活環境で不満なのは「公害」「公園・子供の遊び場」「災害からの安全性」

自分の家のまわりの環境については、七六%の人が、「満足」「まあ満足」しているが、不満な点として特に多くあげられたのが「公害」と「公園・子供の遊び場」「災害からの安全性」である。地区別では都心地域で全体的に不満が多く指摘されている。

●生活環境で不満な項目



昭和57年
中区区民意識調査

中区ふるさとづくりに向かって

［ふるさと］を創る

ふるさとは山があって川があってウサギがいてフナがいて、あたたかい記憶に彩られた帰るべき場所。

それでは、私たちの暮らすこの街は一体どんなよばれ方をすれば良いのでしょうか。もちろんここで生まれて育った人にとってはまぎれもないふるさとですが、ここにはそうでない人の方がたくさん暮らしています。そういう人たちにとっては、ここは都会生活の中の仮の宿でしかないのでしょうか。

ふるさとを、自分の根っこのあるところだと考えるならば、今現在、私たちの暮らしの基盤となっているこの街も、十分ふるさとたり得ます。ただし、このふるさとは創り上げるふるさとです。ここに暮らす人たちの総意によって意識的、計画的に創り上げていかなければならないのです。

では、この街をどう創っていけばいいのでしょうか。

［街なか］

これまでの街づくりは、上下水道や道路、公共施設といったような都市生活に必要な基盤をつくっていくことに主眼がおかれてきました。けれどもそれらが一応の水準に達した今日、街はどれもよく似たものになってしまいました。

これからの街づくりに求められているのは、画一的な物質的充実ではなく、住んでいる人に

とって人間的でうるおいのある個性的な街、住む人の快適性（アメニティー）を重視した街を創ることです。「街なか」に、ふっと親しみをおぼえる街角を創り出したいと思います。

［ひと仲］

ふるさとがふるさとたるのは、そこに人の温もりがあるからです。とかく人と人との結びつきが薄いといわれる都市生活ですが、そこに連帯の輪を創り上げてはいけないものでしょうか。

労働時間の短縮による余暇時間の増加や、また、子供の数が少なくなって女性のライフサイクルが変化したことなど、地域での生活を豊かにしていく時間的余裕が生まれています。スポーツ・文化活動・ボランティア活動など、地域活動を活発にしていくための条件を整備し、「ひと仲」をとりもつ街づくりが求められています。人と人との出会いを通して温もりのある街にしていきたいと思います。

［はまの中］

中区は、港の街として日本全国、また外国からさまざまな人が集まってできた街です。異質な文化が持ち込まれ、それを貪欲に吸収していった先進的な歴史をもっています。「三日住めばハマッ子」といった開放的で包容力のあるこの街の個性は、ここから生まれました。

この「はまの中」ならではの個性を最大限に生かして、国際的に開かれたユニークな街として、国籍や文化やさまざまな違いを越えて共に暮らしていく街にしていきたいと思います。

ふるさと街づくりは皆の力で

ここに暮らす人、一人一人が街づくりの主役です。

いうまでもなく、街にはたくさんの人が暮らしていて、街づくりに関してもいろいろな考え方があるでしょうし、それぞれの利害関係も絡んでくるでしょう。

けれども、だからこそ、「ふるさと街づくり」には多くの人の協力と活発な論議が必要なのです。一朝一夕には為し遂げることができないからこそ、多くの人が街について真剣に考え、合意を求め、粘り強く行動していかなければならないのです。それを支えるものが、街を愛する気持ち＝ふるさとへの思いなのではないでしょうか。

編集後記

ふるさとブームが言われるこの頃です。街の再発見を通じて、今住んでいるこの街に「ふるさと意識」をもっていただければこの本は大成功です。そして、次の段階は住民が主体となった街づくりの実践です。(平松)

●

都会に住む人々にとって、自分達の街を「ふるさと」として特別に意識する必要はあるのだろうか。この本を作る最初の疑問は、未だ私の中でモヤモヤしている。しかし、それも区民の方々のこの本に対する反響が払拭してくれると期待しているところです。(安西)

●

いゃー、本を1冊作るって言うのは大変なもんですね。でも、色々な話を聞いたり、調べたりしてみると中区って本当に面白いなぁと、吾ながら喫驚しました。
さて、次の日曜日にでもこの本を持って、タウンウォッチングにでも出かけてみるかな。ひょんな所でひょんな出会いを楽しみにね。
(笹尾)

●

緑と水を扱ってみると、一人一人の小さな気遣いで大きな効果が期待できるのに、人々のおかれている状況がその周囲に対する配慮を望めないところまできている。こんなにも土地の無策が人々の生活環境を破壊し、心を荒ませるとは……？けれども、こんな時だからこそ、市民一人一人の環境に対する心配りが、住み良い環境をつくる秘訣であると見受けられた。(天野)

●

中区は狭いようでも町ごとにいくつもの顔をもっている。この表情を統計データで表そうとしたが、なかなかないものである。地域にあった街づくりのためにも区民みなさんの意識や行動が整理されることを期待したい。
(日比)

●

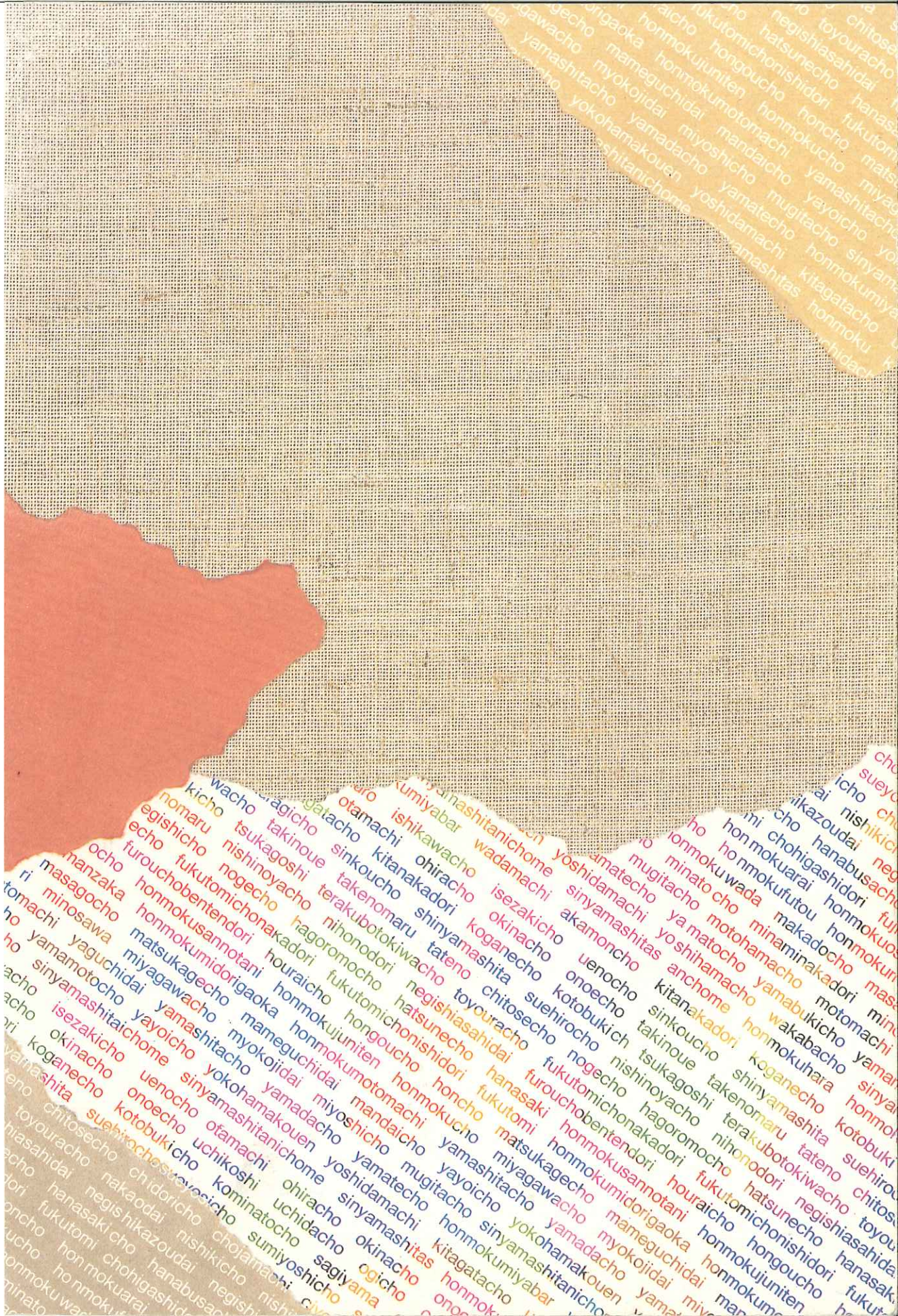
平均寿命が80歳を越えるとなると、人はひと仕事終えてから、それまでの半分近くをさらに生きなくてはならないことになる。学校・職場とともに地域社会をもう一度見直さなければならない時代がきている。そんな感慨がよぎる。(森田)

●

中区はエキゾチックでハイカラな街というイメージが強くて、住んでいる人の姿はなかなか出てきません。でも、街を歩いてみて、ここに暮らす人々が実にこの街を愛していることを知りました。たくさんの方のご協力、本当にありがとうございました。(渡部)

●編集
平松繁利
安西道忠
笹尾賢一
天野敏光
日比章允
木村和治
真木康行
森田稲子
渡部良江
岡部忠昭
杉村晴子
堀内憲治
●デザイン
内藤安彦
●イラスト
荒木英昌
河崎千加子
天野牧子
満田勝則
●写真協力
横浜市広報センター
草柳和美
松井三千子
唐崎旬代
竹森正樹
●協力
中村一恵
●参考資料
「港町 横浜の都市形成史」横浜市企画調整局
「横浜中区史」中区制50周年記念事業実行委員会
「本牧わくわくマップ」横浜市都市計画局

街なか・ひと仲・はまの中
——中区ふるさと白書——

頒価————500円
発行日————昭和62年10月1日　第1刷発行
発行————横浜市中区役所区政推進課
〒231 横浜市中区日本大通35
電話(045)651-1212
横浜市広報印刷物登録第620234号
類別・分類　A-QA040
制作————株式会社 社会調査研究所
制作協力——株式会社 第一プランニングセンター
印刷・製本——東京書籍印刷株式会社

©1987　横浜市中区役所区政推進課　※無断転載・複写を禁じます。